

新町支石墓群

— 史跡整備に伴う新町遺跡第10次調査 —

糸島市文化財調査報告書

第33集

2024

糸島市

新町支石墓群

— 史跡整備に伴う新町遺跡第10次調査 —

糸島市文化財調査報告書

第33集

2024

糸 島 市



1-1 新町支石墓群を北西から望む



1-2 新町遺跡第10次調査全景



2-1 新町遺跡X-3トレンチ全景（上が北）



2-2 新町遺跡X-4トレンチ全景（上が北）



3-1 新町遺跡X-1トレンチ1号墓出土副葬小壺



3-2 新町遺跡X-1トレンチ2号墓出土副葬小壺



4-1 新町遺跡X-3トレンチ1号墓出土副葬小壺



4-2 新町遺跡X-1トレンチ攪乱土坑出土土師皿

序

本書は令和4年度に実施した新町支石墓群の調査成果をまとめたものです。

新町支石墓群が所在する糸島市は玄界灘に面しており、古来より中国大陸・朝鮮半島との交流が盛んな地域として知られ、市内には繁栄ぶりを物語る遺跡が数多く残されています。

そのひとつである新町支石墓群は、弥生時代の始まりの時期に営まれた墳墓遺跡として知られています。この遺跡では朝鮮半島から伝わった支石墓が発見され、わが国における稲作農耕文化の導入・成立過程や当時の社会状況を探る上で極めて重要な情報を提供することとなりました。平成12年度には、日本の歴史を知る上で重要で、価値が高いことが認められ、国民共有の財産として国史跡に指定されました。その後、令和元年度には指定地の恒久的な保存と活用の方針を定めた『国史跡新町支石墓群保存活用計画』、令和3年度には整備事業の礎となる『国史跡新町支石墓群整備基本計画』を策定し、令和4年度には歴史に触れる場や市民憩いの場として史跡整備を行うために『国史跡新町支石墓群整備工事基本設計』を策定しました。この基本設計では史跡地に盛土を行う計画となっていますが、盛土が遺構に与える影響を確認するために、今日の調査では史跡の現状変更を行い遺構の深さを確認し、遺構に与える影響を最小限とする設計を施しました。さらには未確認の遺構や遺物も見つかると新町支石墓群の新たな一面を知ることもできました。今後はこれまでの調査成果を反映した史跡整備を進めていく予定となっています。

なお、末筆となりましたが、国史跡新町支石墓群整備検討委員会の皆様、ご理解とご協力を頂きました志摩新町行政区の皆様、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力を頂きました関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和6年3月31日

糸島市長 月形祐二

例 言

1. 本書は糸島市志摩新町に所在する新町遺跡第 10 次調査の成果をまとめたものである。
2. 本書は令和 4 年度に現状変更の許可を受け、国庫補助を用いて調査を行った。
3. 遺構の実測は調査を担当した平尾和久が行った。
4. 遺構の写真は空中写真を(有)空中写真企画・諫山広宣に委託し、その他は平尾が撮影した。
5. 遺物の復元・実測・製図にあたっては、平尾のほかに藤野さゆり・田中阿早緑・内山久世・蔵田和美・内場まきよ・稲富良子・畑迫優香・山崎嵩雄・田尻裕泰・高橋寛宇・北村仁乃・山口仁美が行った。
6. 遺構の 3D 計測は江野道和・秋田雄也が行った。
7. 巻頭図版の遺物については牛嶋茂氏が撮影し、その他の写真は平尾が撮影した。
8. 本書で用いる座標は世界測地系である。
9. 本書の編集・執筆は平尾が行った。

本 文 目 次

第 1 章	はじめに	1
I	発掘調査と報告書刊行の経緯	1
II	調査の組織	2
第 2 章	位置と環境	3
I	地理的環境	3
II	志摩地域の歴史的環境	3
III	新町遺跡のこれまでの調査経過	6
第 3 章	調査の記録	10
I	調査の概要	10
II	X-1 トレンチの調査	10
III	X-2 トレンチの調査	21
IV	X-3 トレンチの調査	22
V	X-4 トレンチの調査	27
第 4 章	おわりに	31

挿 図 目 次

第 1 図	糸島市の所在地	3	第 13 図	X-1 トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図 4 (1/3)	19
第 2 図	志摩地域の主要遺跡分布図(1/100,000)	4	第 14 図	X-1 トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図 5 (•は 1/2・1/3).....	20
第 3 図	新町・御床松原遺跡周辺の遺跡分布図 (1/3,000).....	5	第 15 図	X-2 トレンチ調査区全体図(1/40)	21
第 4 図	新町遺跡全体図(1/1,000)	6	第 16 図	X-2 トレンチ西壁土層断面図(1/40)	22
第 5 図	X-1・2 トレンチ配置図(1/200)	11	第 17 図	X-2 トレンチ出土遺物実測図(1/3)	22
第 6 図	X-1 トレンチ全体図(1/40)	12	第 18 図	X-3 トレンチ調査区全体図(1/40)	23
第 7 図	X-1 トレンチ東壁・南壁土層断面図(1/40)	13	第 19 図	X-3 トレンチ東壁土層断面図(1/40)	24
第 8 図	X-1 トレンチ 1～3 号墓実測図、副葬小壺 出土状況実測図(1/20・1/10)	14	第 20 図	X-3 トレンチ 1 号墓実測図(1/20)	25
第 9 図	X-1 トレンチ出土遺物実測図(1/3)	15	第 21 図	X-3 トレンチ 2・3 号墓実測図(1/20)	26
第 10 図	X-1 トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図 1 (1/3)	16	第 22 図	X-3 トレンチ出土遺物実測図 (•は 1/2・1/3)	27
第 11 図	X-1 トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図 2 (1/3)	17	第 23 図	X-4 トレンチ調査区全体図(1/40)	28
第 12 図	X-1 トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図 3 (1/3)	18	第 24 図	X-4 トレンチ南壁土層断面図(1/40)	29
			第 25 図	X-4 トレンチ 3 号墓実測図(1/20)	29
			第 26 図	X-4 トレンチ 4 号墓実測図(1/20)	30
			第 27 図	X-4 トレンチ出土遺物実測図 (1/2・•は 1/3)	31

図 版 目 次

巻頭図版 1-1	新町支石墓群を北西から望む	2-2	2 号墓副葬小壺出土状況
1-2	新町遺跡第 10 次調査全景	2-3	西壁土層
巻頭図版 2-1	新町遺跡 X-3 トレンチ全景(上が北)	図版 3-1	新町遺跡 X-2 トレンチ全景
2-2	新町遺跡 X-4 トレンチ全景(上が北)	3-2	炉壁出土状況
巻頭図版 3-1	新町遺跡 X-1 トレンチ 1 号墓出土 副葬小壺	図版 4-1	新町遺跡 X-3 トレンチ全景
3-2	新町遺跡 X-1 トレンチ 2 号墓出土 副葬小壺	4-2	1 号墓上石
巻頭図版 4-1	新町遺跡 X-3 トレンチ 1 号墓出土 副葬小壺	図版 5-1	1 号墓副葬小壺出土状況
4-2	新町遺跡 X-1 トレンチ攪乱土坑出 土土師皿	5-2	1 号墓東側支石検出状況
図版 1-1	新町遺跡 X-1 トレンチ全景	5-3	3 号墓検出状況
1-2	1 号墓検出状況	図版 6-1	新町遺跡 X-4 トレンチ全景
1-3	1 号墓副葬小壺出土状況	6-2	3 号墓検出状況(西から)
図版 2-1	2 号墓検出状況	図版 7-1	3 号墓検出状況(北から)
		7-2	3 号墓金属探査機使用状況
		7-3	4 号墓検出状況
		図版 8	新町遺跡第 10 次調査出土遺物①
		図版 9	新町遺跡第 10 次調査出土遺物②

第1章 はじめに

I 発掘調査と報告書刊行の経緯

新町支石墓群は糸島半島の北西部、引津湾に面した砂丘上に位置する。弥生時代早期～古墳時代前期の墳墓を主体とした遺跡である。

遺跡の発見は大正時代にさかのぼり、中山平次郎氏によって弥生土器などの遺物が紹介され、御床松原遺跡と同様に土器散布地として知られていた。昭和61（1986）年には、この場所で宅地造成の計画が持ち上がり、志摩町（現糸島市）が事業主体となり、福岡県教育委員会から職員の派遣を受けて発掘調査が実施された。調査の結果、支石墓が確認されるとともに、支石墓から全国初となる弥生時代早期の人骨が確認された。人骨は分析の結果、主に縄文人的特徴を残すことが判明し、人類学における大きな成果となった。

調査にあたっては遺構を極力保存する方針とし、57基の墓のうち、24基については掘削せず、遺構の輪郭を検出した段階で止めている。なかでも上石の残る支石墓については7基のうち、2基のみの調査とした。

平成4（1992）年にはこの地点を「新町遺跡」として町史跡に指定し、同年から平成5（1993）年度にかけて地域文化財保全事業により土地の公有化及び「新町遺跡展示館」を設置した。展示館は遺構の保全を第一とするため、盛土を行った後にそれぞれの遺構の真上に複製した支石墓を展示した。ほかの支石墓を有する遺跡の多くが現状保存又は一部分の複製展示に留まっている中であって先進的な保存と展示法であったといえる。

平成12（2000）年度には「新町支石墓群」として国史跡の指定を受け、平成16・17（2004・2005）年度には新町遺跡環境整備推進委員会を立ち上げ、『新町遺跡保存整備事業基本構想・基本計画』の素案を策定した。平成19年からは指定地の公有化事業を開始し、平成28年（2016）年度までには用地の大半を公有化し、事業を終了した。令和元（2019）年度には文化庁の史跡等保存活用計画等策定費国庫補助金の交付を受けて、新町支石墓群の恒久的な保存と、未来への継承、学校教育・生涯学習・観光・日常的な利用等々さまざまな面での活用を促進するために、新町支石墓群整備検討委員会を立ち上げ、『国史跡新町支石墓群保存活用計画』を策定し、令和3（2021）年度には『国史跡新町支石墓群整備基本計画』を策定した。令和4（2022）年度には『新町支石墓群整備工事基本設計』を策定したが、盛土の高さ等の根拠として遺構面の深さの確認が必要となり、7月22日に現状変更の許可を受け、史跡地内に4か所のトレンチを設定した。基本的に遺構は平面確認で、遺物も表面採集に止めた。発掘調査は8月22日～12月9日まで行い、報告書は令和5（2023）年度に作成し、令和6年（2024）3月31日に刊行した。

II 調査の組織

令和4年度に実施した新町遺跡第10次調査の調査組織は以下のとおりである。

糸島市

	令和4年度（発掘調査）	令和5年度（報告書作成）
総括 糸島市長	月形 祐二	月形 祐二
地域振興部長	波多江 修士	波多江 修士
文化課長	村上 敦	村上 敦
文化課課長補佐兼		
文化財係長	河合 修	河合 修
文化課主幹	平尾 和久	平尾 和久

国史跡新町支石墓群整備検討委員会（令和4・5年度）

委員長	西谷 正（九州大学名誉教授 伊都国歴史博物館名誉館長）
副委員長	包清 博之（九州大学大学院芸術工学研究院教授） 令和5年度より名誉教授
委員	伊崎 俊秋（八女市岩戸山歴史文化交流館長）
	舟橋 京子（九州大学比較社会文化研究院准教授）
	洞龍 二郎（福岡県文化財保護指導委員 元糸島市文化課長）
	中原 秀和（志摩新町行政区長）
	中野 浩尚（令和4年度 糸島市立引津小学校長）
	井手 淳一（令和5年度 糸島市立引津小学校長）

発掘調査補助員

三宅浩一・生田弘毅・市丸千賀子・久間美佐子・中山健介

整理補助員

藤野さゆり・田中阿早緑・内山久世・蔵田和美・稲富良子・畑迫優香・山崎嵩雄・田尻裕泰

整理作業員

内場まきよ・高橋寛宇・北村仁乃・山口仁美

第2章 位置と環境

I 地理的環境

糸島市は平成22年1月1日に前原市と二丈町、志摩町とが合併して誕生した市で、東は福岡市、西は佐賀県唐津市、南は佐賀市と境を接する。面積は215.69km²、人口は103,792人（令和5年11月30日現在）の市で、近年は区画整理事業も進展するなど、福岡市近郊都市にみられるベッドタウン化が急速に進行している。人口の約半数は国道202号線沿いに集中し、残りの半数は田園地帯が多く残る市域全体に広がる。

糸島地域は地形的に南に井原山、雷山、羽金山、女嶽、浮嶽などの脊振山系の山々、東が高祖山と今津湾、北と西は玄界灘で画される比較的まとまった地域で、現在の行政区画では糸島市全域と福岡市西区の長垂山以西を含む。

地質的には高祖山が花崗岩であるほかは、花崗閃緑岩が広く分布しており、低チタンの良質な砂鉄を多く含む。また、雷山山頂から飯場峠付近にかけては三郡変成岩が展開する。可也山や今山では頂上付近に玄武岩があり、後者では弥生時代初頭から前半期にかけて大型蛤刃石斧の材料として用いられている。

主な平野は怡土平野、一貴山・深江平野、糸島低地帯の3箇所、糸島低地帯の大半は近世の干拓事業で形成された新しい平野である。

本書で報告する新町遺跡の調査区は糸島市志摩新町に所在する国指定史跡新町支石墓群に含まれる。引津湾に面する砂丘上に形成された弥生時代早期から前期を中心とする墓群で、現在の海岸線からは直線距離で約180m離れた標高3m前後の地点に営まれている。



第1図 糸島市の所在地

II 志摩地域の歴史的環境

糸島市の北半部に位置する志摩地域は、外周の半分以上が海に面していることが特徴である。もともとは西から加布里湾、東から今津湾が大きく湾入しており、志登一泊間が陸橋で繋がる程度の島状の形態であったと想定されているが、近世の干拓事業を経て今日の形となっている。

志摩地域で確認される遺跡は、古くは縄文時代前・中・後期の遺物が出土する天神山貝塚などがあるが、縄文時代後期になると遺跡数が増加し、新町遺跡、



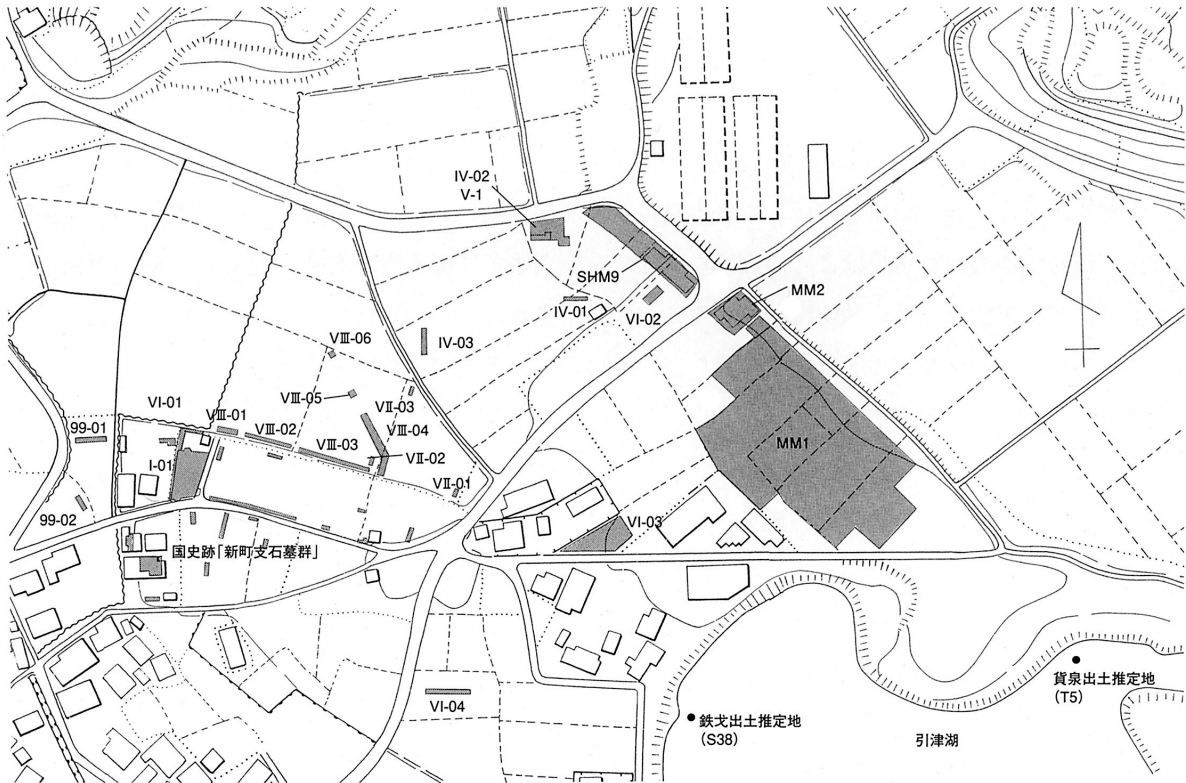
第2図 志摩地域の主要遺跡分布図 (1/100,000)

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 新町支石墓群 | 2. 御床松原遺跡 | 3. 天神山貝塚 | 4. 久保地古墳群 | 5. 天神前遺跡 |
| 6. 藤原遺跡 | 7. 新町遺跡 | 8. 岐志元村遺跡 | 9. 千町田遺跡 | 10. 八熊製鉄遺跡 |
| 11. 大牟田遺跡 | 12. 熊添遺跡 | 13. ウスイ遺跡 | 14. 木藤丸遺跡 | 15. 一の町遺跡 |
| 16. 稲葉古墳群 | 17. 権現古墳 | 18. 四反田古墳群 | 19. 井田原開古墳 | 20. 蓮輪遺跡 |
| 21. 荒牟田古墳群 | 22. 吹切遺跡 | 23. 久米遺跡 | 24. 谷古墳群 | 25. 大峠遺跡 |
| 26. 大原 A 遺跡 | 27. 桑原飛櫛貝塚 | 28. 元岡瓜生貝塚 | 29. 泊大塚古墳 | 30. 御道具山古墳 |
| 31. 大原 D 遺跡 | | | | |

岐志元村遺跡など引津湾沿岸部で継続的な貝塚の形成が認められる。

弥生時代になると志摩地域の遺跡はさらに増加する。新町遺跡や御床松原遺跡では古くから弥生土器や貨泉、鉄戈の出土が報告されていたが（中山 1917、大神 1965）、1980 年代になると発掘調査も増加し、遺跡の具体像も明らかとなってきた。

新町遺跡では昭和 61（1986）年から本格的な発掘調査が実施され、弥生時代早期～前期前半の支石墓などからなる墓域が確認された。その後、墓域の範囲確認調査を継続的に行い、南北 80m、東西 140m の範囲に弥生時代早期から古墳時代前期まで墓域が継続的に営まれたことが確認された（橋口編 1987）。第 1 次調査では 57 基の墓が確認され、その 1/3 程度が支石墓とされる。この調査で確



第3図 新町・御床松原遺跡周辺の遺跡分布図 (1/3,000)

認められた墓の約半分が現地保存され、平成 12 (2000) 年度には新町支石墓群として国の史跡に指定され今日に至る。また、新町遺跡の東側には御床松原遺跡が所在しており、弥生時代前期末から古墳時代後期に到る住居跡を主体とする集落が展開し (井上編 1983)、ある時期は新町支石墓群と一体的に営まれた集落遺跡と判断される。また、柳田康雄氏により資料の再検討が進められ板石硯の存在が指摘されている (柳田 2021)。なお、志摩地域では弥生時代に真珠の採取が行われ (黒住 2013)、御床松原遺跡ではアワビオコシの存在からアワビ真珠獲得の可能性も指摘されるなど (下條 1998)、対外交渉を視野に入れた資源開発の視点からの研究も進められており (高田 2021)、塩生産もその一環で行われた可能性がある。

このほか、久米遺跡では弥生時代中期前半の甕棺墓が 24 基確認され、23 号甕棺墓から銅戈が、6 号甕棺から銅剣が出土するなど、糸島市内で確認事例が少ない弥生時代中期前半段階の武器形青銅器を副葬するものとして重要である (河合編 1999)。また、可也山北側の内陸部に所在する一の町遺跡では 100m²を超える大型の総柱建物が確認されていることから、弥生時代後期後半には三雲・井原遺跡と対比しうるような志摩地域を代表する拠点集落が営まれたことがわかる。

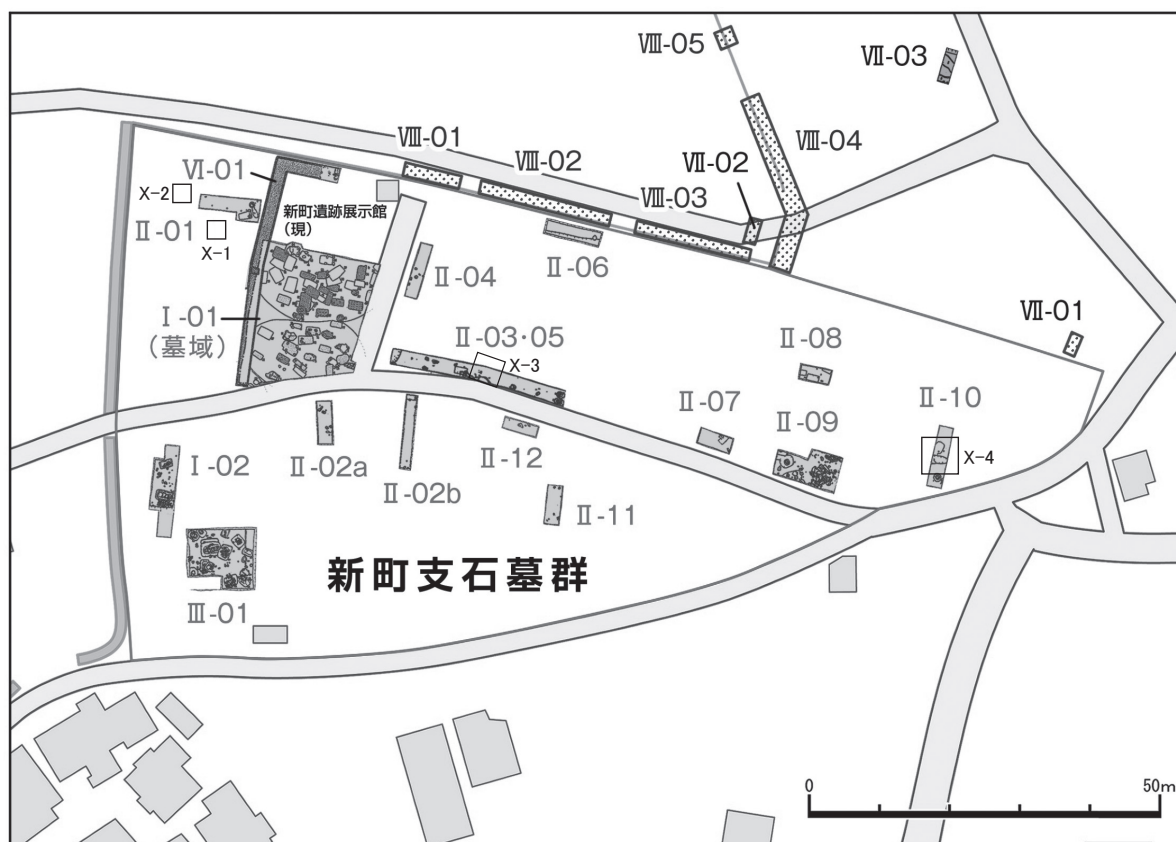
古墳時代に入ると、市内各地に前方後円墳が築かれる。志摩地域の前・中期では半島の付け根周辺に集中し、権現古墳や稲葉古墳群、井田原開古墳などが分布する。特に井田原開古墳は後円部が半分ほど削平されるものの、一貴山銚子塚古墳に次ぐ全長 93m の規模を誇ることで、国内における鱈付円筒埴輪の分布の西端に位置することから、畿内地域との関連性を見るうえでも重要である (河合編 2012)。

古墳時代以降は八熊製鉄遺跡や蓮輪遺跡などの製鉄遺構、吹切遺跡などの炭窯関連遺構が確認されており、大規模なものとして元岡・桑原遺跡群がある。とくに第12次調査では8世紀中頃～後半の製鉄炉が27基確認されており、西日本屈指の製鉄遺跡とされる。これらは756年より築城が開始される怡土城との関連性も注目される。また、第18次調査では7世紀代の石組井戸も複数確認されているが、当代の石組井戸は飛鳥地域を中心とした地域に分布が限られることから、大規模生産遺跡としての元岡・桑原遺跡の形成の契機を考える上で重要な遺構といえる。

そのほか、「観世音寺資財帳」には筑前国志麻郡加夜郷蠅野林と遠賀郡山鹿林東山の「焼塩山式処」が大寶三（703）年に施入されたことや、9世紀中頃に志麻郡司が観世音寺に和同2（709）年に施入された「熬塩鉄釜」を借用し煎塩を行った記録が残り、志摩地域における製塩の存在が分かる。今後はその前段階における土器製塩遺構の確認も課題となる。

Ⅲ 新町遺跡のこれまでの調査経過

新町遺跡のこれまで9次にわたる発掘調査が行われ、本報告収録分で第10次となる。遺跡の発見から今日に至るまでの調査経過は『新町・御床松原遺跡』（河合編 2010）にまとめられているが、そこから10年以上が経過しているため、本報告において要点を再録するとともに、その後に行われた発掘調査の成果を概観する。



第4図 新町遺跡全体図（1/1,000）

・御床松原遺跡における「貨泉」の発見（大正6年）

大正6（1917）年、九州大学医学部の中山平次郎氏は、現在の御床松原遺跡にあたる沖田川河畔の土器包含層より、弥生土器と共に新代（後8-25）の貨幣である「貨泉」を発見し、その年代より金石併用時代の存在と年代観を示す材料とした。また、中山氏は御床松原遺跡や新町遺跡の土器を標識とした前期末の「新町式土器」中期後半の「御床式土器」を設定し、北部九州の弥生土器の時期区分の示す指標とした。

・御床松原遺跡での鉄戈出土（昭和38年）

昭和38（1963）年に志摩新町の海岸地帯で採砂が開始され、同年5月に弥生土器が多数出土しているとの報告を受けた糸島高校歴史部顧問の大神邦博氏らは、歴史部員と共に現地調査を重ね、多くの遺物を採集し、糸島高校郷土博物館に収蔵するとともに6月14日にはサンドポンプによって吸い上げられた鉄戈を回収している（大神1965）。また、同博物館にはこの時に採集された可能性が高い古墳時代の土製人形等も収蔵されている。

・引津湖造成時の調査（昭和45年）

御床松原遺跡内の引津湖の築堤工事において、多量の遺物が出土し、原田大六・大神邦博両氏と糸島高校歴史部員らは緊急調査を実施したが、工事はすでに進展しており、部分的な調査と遺物の採集が中心であったようだ。この時の出土品は、弥生時代中期から古墳時代初頭のもものが主体で、現在、志摩歴史資料館に収蔵されている。

・御床松原遺跡第1次調査（昭和57年）

農地整備の砂利採集工事に伴い発掘調査が行われた。この調査では100軒を超える弥生～古墳時代の住居跡が確認され、石錘・鉄製品など多種多様な漁撈具が出土した。また、楽浪系土器や後漢鏡片も出土していることから漁撈活動に従事しながら交易等にも携わる外港的な遺跡であることが明らかにされた（井上編1983）。

弥生時代の集落は砂丘尾根上に展開する。前期末は住居1、土坑1、中期は住居21、土坑18、甕棺1、溝2、後期は住居11、土坑1が確認されており、住居跡は方形プランで中央に炉をもつものが多い。古墳時代の遺構は丘陵尾根から斜面に到る広範囲に展開する。とくに調査区北半部は遺構が密集しているため、切り合いも激しく全形がわかる遺構が少ないが、前期では住居62、土坑5、後期は住居6、土坑1が確認された。また、奈良時代の遺構もわずかに認められ、土壙墓1、馬埋葬土坑1、鍛冶炉4、区画溝2が確認されている。

・岐志元村貝塚の発見（昭和59年）

新町遺跡の北西約500mの丘陵裾で行われた簡易水道工事中に縄文土器と貝殻が多数出土した。縄文土器は福田KⅡ式、北久根山式、三万田式など縄文時代後期～晩期初頭のもので、シカの尺骨や鹿角製刺突具を伴う。

・新町遺跡第1次調査（昭和61年）

個人住宅建設に伴い第1地点（I-01）、第2地点（I-02）の2地点で調査が行なわれた。

第1地点では支石墓を含む57基の弥生時代早期～前期前半にかけての墳墓群が確認された。このうち、上石が原位置を保ちほぼ完全な形で残る支石墓7基をはじめ、全体の約1/3が支石墓であったとされる。支石墓には副葬小壺を伴うものがあり、その時期的変遷から北半に早期の墳墓、南半に前

期の墓群が形成すると判断されている。また、砂丘上の墳墓であることから、人骨も良好な状態で出土しており、縄文弥生移行期の事例として重要な資料に位置付けられる（橋口編 1987）。

第 1 地点から南西に約 20m 離れた第 2 地点では古墳時代前期の土壙墓や箱式石棺墓が確認された。

・新町遺跡第 2 次調査（昭和 62 年）

第 1 次調査の翌年にトレンチによる墓域範囲確認調査が行われた。周辺一帯に 13 か所のトレンチが設置され、墓域が西から東へと展開することが確認された。この調査においても早期～前期の壺棺が良好な状態で確認され、弥生時代早前期の土器棺の編年的研究の進展に大きな役割を果たした。また、II-09 トレンチの 1 号甕棺直上から四銖半両銭が出土した（橋口編 1988）。

・新町遺跡第 3 次調査（平成元年）

住宅建設の事前調査として、第 1 次調査区の南側の調査を実施した。弥生時代終末期～古墳時代前期の墓域が展開しており、石棺墓 7、甕棺墓 2、土坑 5 が確認された。なお、遺物包含層からは弥生時代前期～古墳時代前期、奈良時代の遺物が出土し、馬埋葬土坑も確認されている（小池編 1990）。

・新町遺跡第 4 次調査（平成 2 年）

新町遺跡で確認された墓域に対応する居住域と御床松原遺跡 1 次調査の西限を確認するため 3 か所のトレンチ調査（IV-01 ～ 03）を実施した。その結果、中世の土壙墓、縄文時代後期初頭の土坑群が確認された（河村編 1991）。

・新町遺跡第 5 次調査（平成 2 年）

第 4 次調査の IV-02 トレンチを拡張する形で第 5 次調査を行なった。その結果、縄文時代の土壙墓群と貝層が確認された。土壙墓からは両腕にサルボウ貝輪を装着し仰臥屈肢の姿勢で埋葬された熟年女性の人骨が出土し、その頭部には木の葉を圧着して施文する特殊な土器を副葬する。また、貝層は上部が削平され深さが 40cm 程度であったが、縄文時代後期初頭～後期中頃の土器類と共に、糞石やクジラの椎体骨も出土した（河村編 1992）。

・新町遺跡第 6 次調査（平成 4 年）

新町遺跡と御床松原遺跡の接点を探るためなどに 4 か所のトレンチ調査を実施した。第 1 次調査区に北接する VI-02 トレンチから一連のものと想定される 58 号墓が確認された（河村編 2006）。

・岐志元村遺跡の発掘調査（平成 10 年）

九州大学考古学研究室により海徳寺の南丘陵上に所在する箇所調査が実施された。その結果、縄文時代後期中頃の北久根山式段階の住居跡と縄文時代後・晩期の十代後半の女性を葬る土壙墓が確認された（宮本編 2000）。

・平成 11 年度新町遺跡史跡範囲内容確認調査（平成 11 年）

新町遺跡の国史跡指定申請に伴う範囲内容確認を目的とし、第 1 次調査地点（I-01）の西側 2 か所でトレンチ調査を行なった。いずれも古墳時代の遺物が主体であったが陶質土器が多く出土したことが注目される。なお、本調査だけは例外的に新町遺跡の調査回数に含まれていない（河村編 2006）。

・新町遺跡第 7 次調査（平成 17 年）

国史跡指定範囲の北側に隣接地に水田の存在の想定し、3 か所にトレンチ（VII-01 ～ 03）を設置した。東側から流れ込んだと思われる弥生時代中期の土器包含層が確認されるとともに、VII-03 で土坑や溝状遺構が確認された（河村編 2006）。

・新町遺跡第8次調査（平成19年）

沖田川下流域の圃場整備に伴い史跡指定範囲の北側に隣接する現水田の発掘調査を実施した。内容が軽微な盛土であったため、水路設置部分に6か所のトレンチ（Ⅷ-01～06）を設定した。いずれも弥生時代中・後期の土器を含む遺物包含層が確認された。

・新町遺跡第9次調査／御床松原遺跡第2次調査（平成20年）

県道福岡志摩前原線建設工事に伴い史跡地より北東側約120mの地点の発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中・後期の貝層、弥生時代中期の甕棺墓や円形住居跡などを確認した。その東隣接する御床松原遺跡2次調査では弥生時代前期～中期の土坑や遺物包含層を確認した（河村編2010）。

・海徳寺遺跡第1次調査（令和2年）

県道福岡志摩前原線道路改良事業に伴い発掘調査を実施した。特に新町遺跡から西に約500m離れたI区の谷部包含層からは縄文時代後期～弥生時代中期後半までの土器を中心とする遺物が大量に出土しており、その西に接する丘陵部には当該期の居住域が広がる可能性がある（平尾・秋田編2022）。特徴的なものとして層灰岩製の片刃石斧、磨製石剣のほか、打欠石錘や板状の鉄素材がある。

・新町遺跡第10次調査（令和4年度）

新町支石墓群の史跡公園化に伴う事前の内容確認の調査を実施し、4か所にトレンチを設定した（X-1～4）。X-1・2トレンチでは弥生時代早期の支石墓と思われる墓群を確認し、X-3ではⅡ-03で確認されていた支石墓の再調査を行った結果、副葬小壺片を確認し、時期の特定に至った。Ⅱ-10トレンチと重複するX-4トレンチでは弥生時代中期中葉の甕棺墓を確認した。詳細は本書で報告する。

【参考文献】

- 井上裕弘編 1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集
大神邦博 1965「糸島郡志摩村新町発見の鉄戈について」『糸高文林』13
河合修編 1999『久米遺跡』志摩町文化財調査報告書第21集
河合修編 2009『一の町遺跡発掘調査概要』志摩町文化財調査報告書第30集
河合修編 2010『新町・御床松原遺跡』糸島市文化財調査報告書第2集
河合修編 2012『井田原開古墳』糸島市文化財調査報告書第9集
河村裕一郎編 1991『新町遺跡Ⅳ』志摩町文化財調査報告書第14集
河村裕一郎編 1992『新町遺跡Ⅴ』志摩町文化財調査報告書第16集
河村裕一郎編 2006『新町遺跡Ⅵ』志摩町文化財調査報告書第26集
黒住耐二 2013『真珠の考古学—未知の真珠採集遺跡発見を目指して—』科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)研究成果報告書
小池史哲編 1990『新町遺跡Ⅲ』志摩町文化財調査報告書第10集
下條信行 1998「倭人社会の生活と文化」『古代を考える 邪馬台国』吉川弘文館
高田健一 2021「魏志倭人伝からみた弥生時代倭の天然資源」『昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暦記念論集—』
中山平次郎 1917「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて（一）」『考古学雑誌』7-10
橋口達也編 1987『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集
橋口達也編 1988『新町遺跡Ⅱ』志摩町文化財調査報告書第8集
平尾和久・秋田雄也編 2022『海徳寺遺跡』糸島市文化財調査報告書第27集
宮本一夫編 2000『福岡県岐志元村遺跡』九州大学大学院人文科学研究院考古資料集1
柳田康雄 2021「御床松原遺跡の方形板石硯・外来系土器・白色付着土器」『令和3年度九州考古学会総会研究発表資料集』

第3章 調査の記録

I 調査の概要

今回の調査は史跡地内の調査であるため、令和4年5月31日に現状変更申請書を提出し、令和4年7月22日に文化庁より許可された。調査は令和4年8月22日～12月9日まで実施した。調査地点は糸島市志摩新町78に2つのトレンチ(X-1・2)、志摩新町67と54-1にそれぞれトレンチを設定した(X-3・4)。X-1・2トレンチでは弥生時代早期の支石墓と想定される墓を確認し、X-3トレンチでは2次調査Ⅱ-03トレンチで確認されていた支石墓の大きさや時期を確認した。また、X-4トレンチでは弥生時代中期中葉の甕棺を検出した。いずれも保存される地点であるため、調査範囲は必要最小限とし、甕棺等の遺構は平面検出に止めた。また、遺構の掘り下げは行っていないが、包含層の遺物などは取り上げ、本書で報告する。

Ⅱ X-1 トレンチの調査

1. X-1トレンチ (第6図)

新町遺跡展示館西側の志摩新町78番地に設定したトレンチである。当地では以前から大石があると伝わるなど、支石墓の存在が想定されていた地点である。2次調査でもⅡ-01トレンチが設定され、その西端部から支石墓上石が破砕された状態で確認されており、その実態解明も求められていた。

今回、そのⅡ-01トレンチの南側と西側の2か所にX-1、X-2トレンチを設定した。

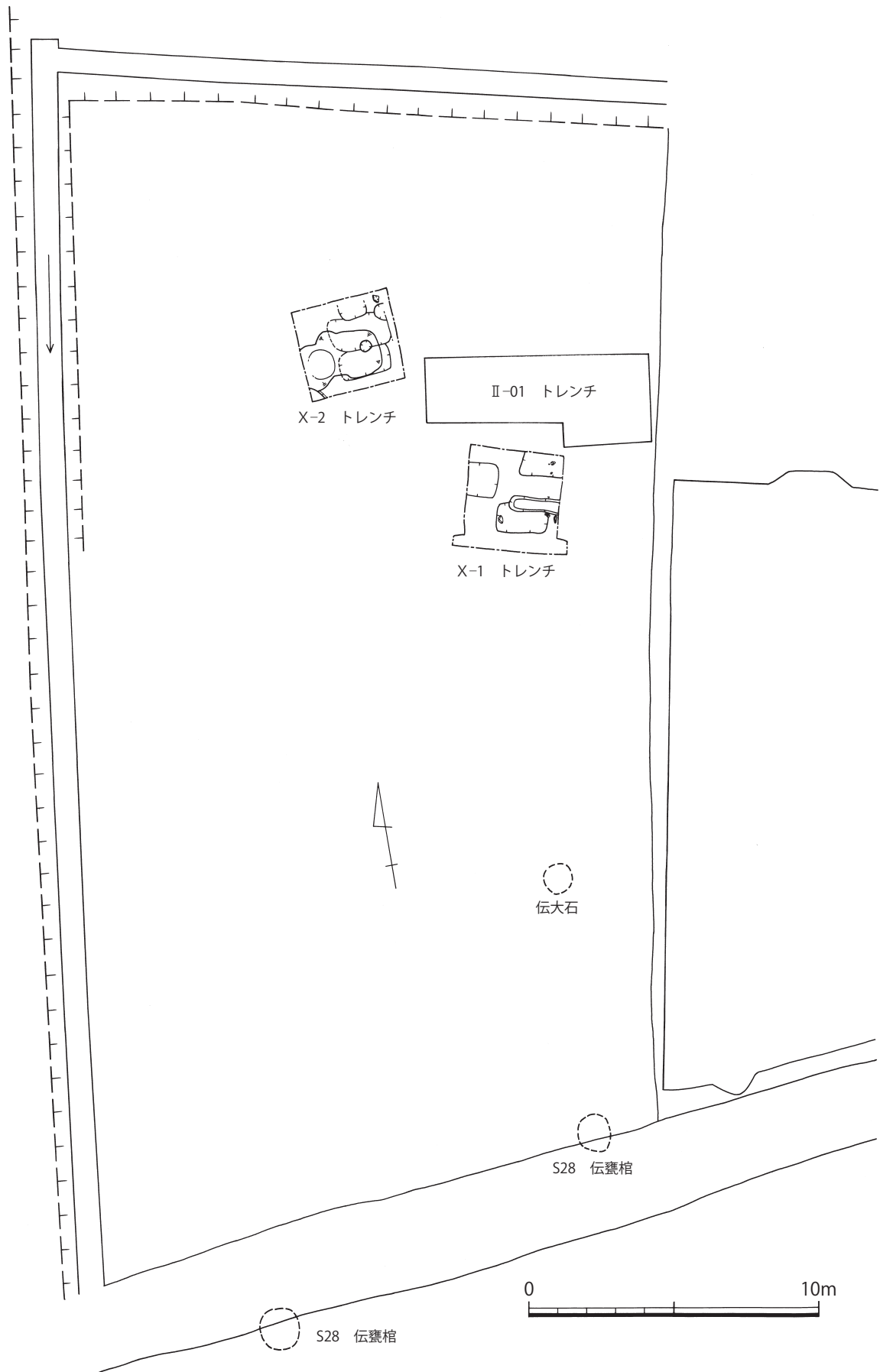
X-1トレンチではまず、遺構面の深さを探るため幅0.4m、長さ4.0mのトレンチを設定し、掘り下げた。現地表面から約60cm下である標高3.3m付近から黄砂層が確認され、地山と判断した。そのあと面的に確認するために北側に調査区を幅1m拡張した。その結果、攪乱土坑に切られる長方形の土壌を確認した。西端部には人頭大の石が1個あるとともに、東端部に攪乱土坑によって壊された副葬小壺を確認した。ただ、この段階では攪乱土坑が半分程度しか検出できていなかったため、さらに北側へ1.8～2.0mほど調査区を拡張した。最終的には3.46m×3.2mの正方形に近いトレンチとなった(第6・7図)。

1) 支石墓

1号墓(第8図) 調査区中央南寄りで確認された長さ1.78m、幅1.0mの墓壙をもつもので東西方向に長軸をもつ。西端部に30cm×20cmのやや上が尖る石も確認されているが、支石かどうか判断できない。また、北側の大半を攪乱土坑により切られ、墓壙東端部に置かれていた副葬小壺が壊されている。調査区の東壁際にも長さ約30cmの石が確認されたが、やや扁平であるため支石とはいえないだろう。

出土遺物(第9図1) 1号墓東端に置かれ、攪乱土坑により半分が割りとられた副葬小壺である。小壺の破片は攪乱土坑内および北側でも出土している。全体的に残りはよいが、攪乱土坑に壊された部分は脆くなっている。

口縁部は丸味をもって小さく広がり、端部は丸く収める。頸部も弱く内湾しつつ広がり、胴頸部の



第5図 X-1・2トレンチ配置図 (1/200)

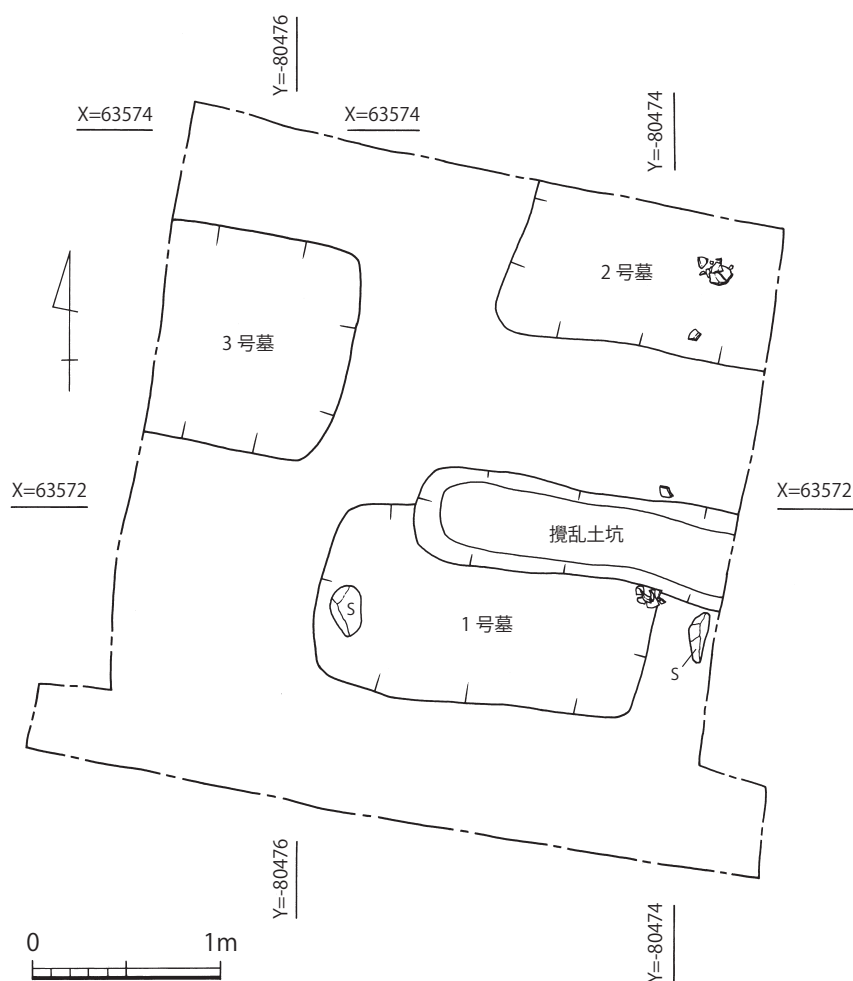
境に2条の沈線を巡らせる。胴の張りは強く、外面は全面に横ミガキを施す。口縁部内面は内湾し、横ミガキを施す。頸部下半は横ナデにかわる。胴部内面は縦ナデと指オサエを併用するが、胴部最大径付近に強いナデを施し、上半部に指オサエを多用する。器高12.4cm、口径8.1cm。

2号墓（第8図）調査区北東隅で確認された長さ $1.4m + \alpha$ 、幅 $0.8m + \alpha$ の墓壇である。先に副葬小壺を確認し周辺を精査したのち、検出した遺構であるため、プラン等にはやや不安が残る。長軸は東西方向にのびる。

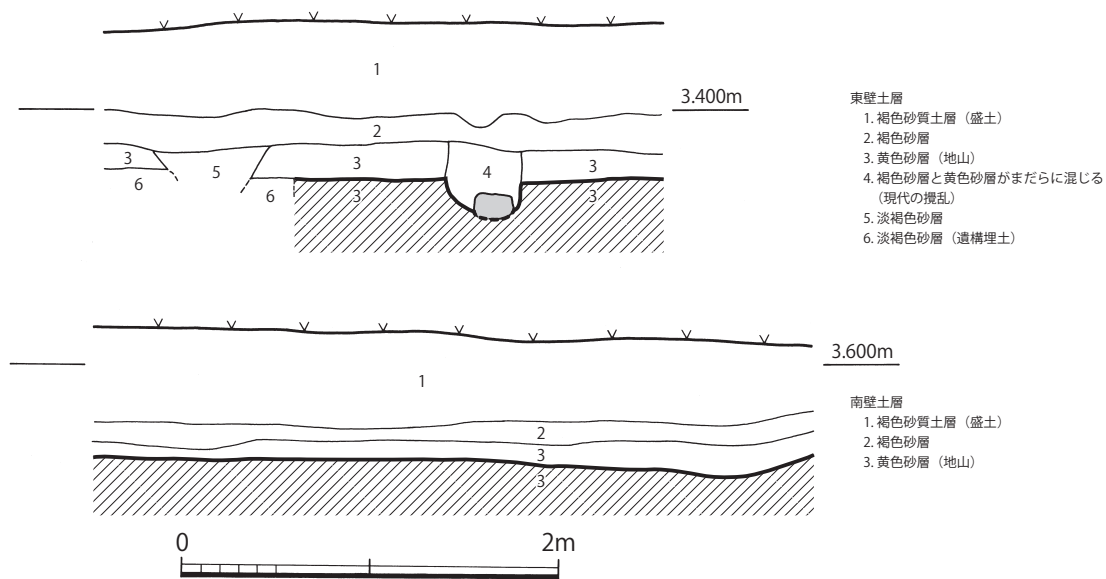
出土遺物（第9図2・3）2は2号墓の墓壇上から割れた状態で出土した副葬小壺である。上からの土圧で押し潰されたような状態で検出され、全体の約1/2を取り上げた。その後、同一レベルで周辺を精査したが、壺の破片は確認できなかった。墓壇内への落ち込みや調査区外に残存する可能性もある。実測図は反転復元したもので、器高12.1cm、口径8.1cm、胴部最大径12.7cm、底径5.3cmである。口縁部は小さく広がり、端部を丸く収める。頸部は緩やかに広がりつつ、肩部の段にいたる。段は横ミガキによって甘くなることもあるが、全体的に明瞭である。胴の張りは強く、底部は1mm程度上げ底となっているが、平底と認識してよいだろう。外面は全面に横ミガキを施す。胴部上半は横ミガキの上に手首の動きを活かした弱い円弧状の横ミガキが入る。

内面は口縁部屈曲部に稜が入るが、横ミガキが施されており弱い。横ミガキは口頸部の境から下に2cm程度認められるが、下から上への指ナデにより切られる。胴部内面も縦ナデが認められるが、胴部最大径付近には強い縦ナデが施され、板状の工具を用いた可能性が高い。底部付近はナデを施すが、液状のものが垂れたような黒色の痕跡が残る。

3は墓壇中央南端部で出土したもので、古墳時代前期の甕の口縁部片である。小片であるため不安が残るが、口径18.0cmに復元される。新町支石墓群で



第6図 X-1トレンチ全体図 (1/40)



第7図 X-1トレンチ東壁・南壁土層断面図 (1/40)

は支石墓墓壇検出面でも新しい遺物が出土することが多く、長期間、支石墓が露出していたことが想定される。

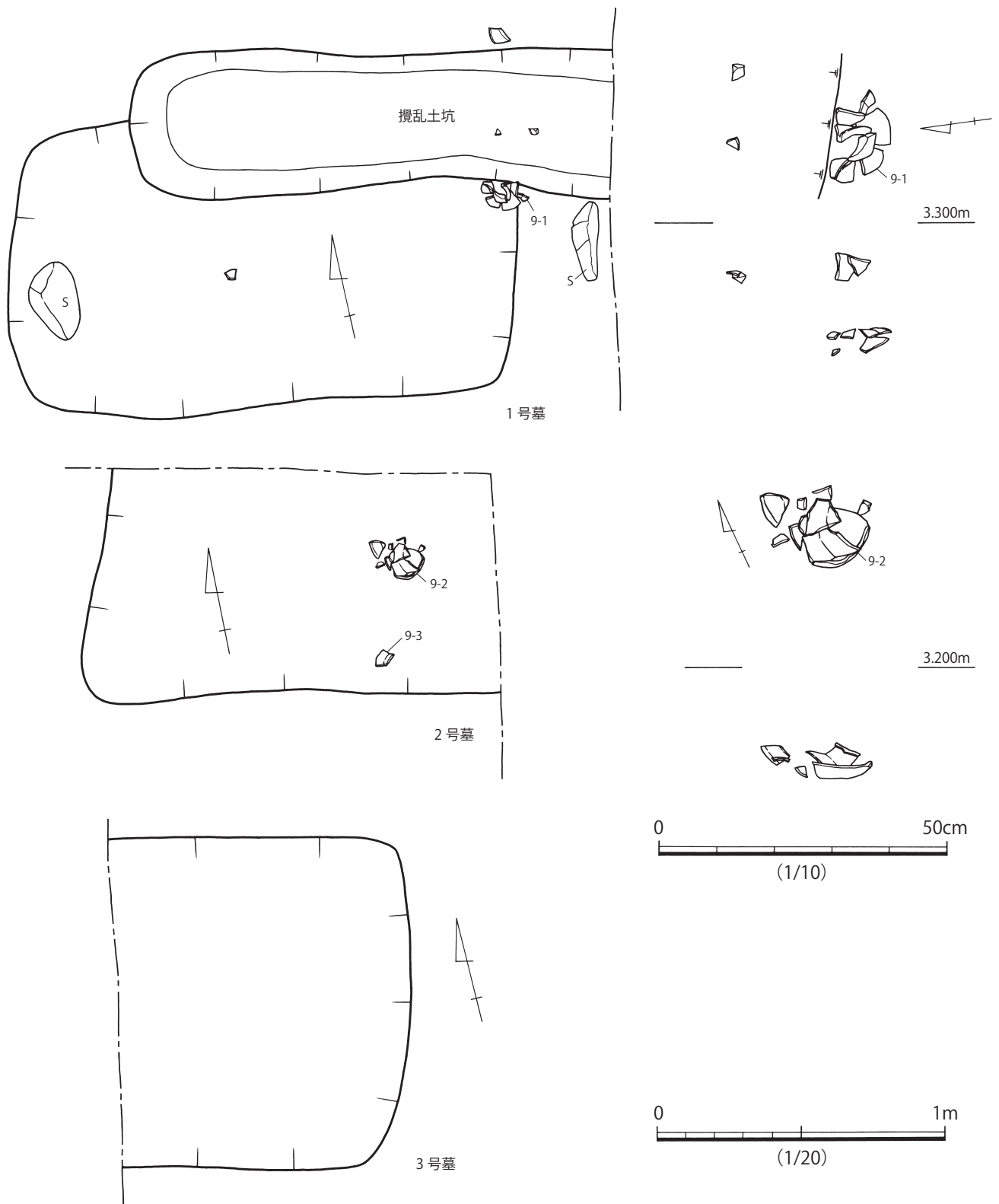
3号墓 (第8図) 調査区中央西端で確認された長さ 1.0m+ α 、幅 1.2m の墓壇である。地山の黄砂とは締まり具合が異なったため、墓壇プランとしたがやや不安が残る。出土遺物はない。

2) 攪乱土坑 (第6図)

調査区の東壁中央から西に延びる溝状の土坑である。長さ 1.7+ α m、幅 0.44m を測る。1号支石墓の北辺を切って掘り込まれており、その際に副葬小壺を壊している。なお、1号墓に上石があった場合はこのように近接して土坑が掘り込めないため、この段階には上石は撤去されていたと判断される。このような状況はII-01 トレンチで確認された上石を破碎して廃棄した状況と整合性がとれる。なお、土坑には陶磁器等が隙間なく廃棄されており、特徴的な資料も散見されるため、以下で遺物を報告する。

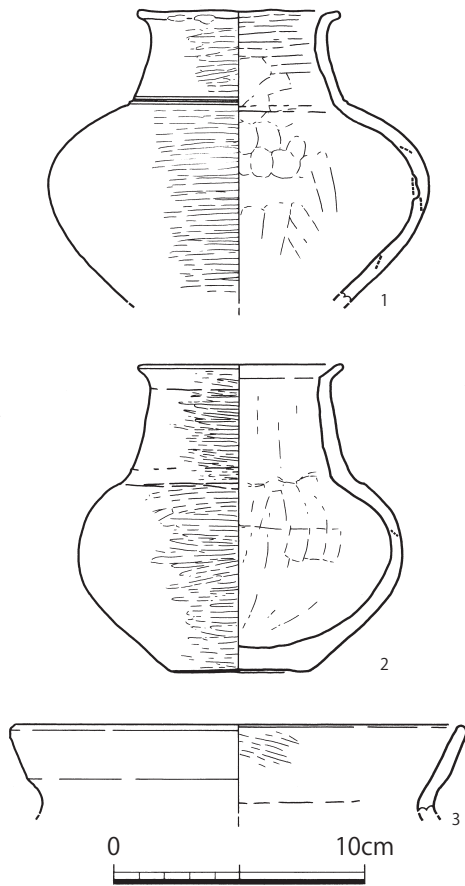
出土遺物 (第10～14図) 第10図1～5は椀である。いずれも器高 5.8cm、口径 11.2cm、高台径 4.2cm程度のもので、口縁部付近に草花文を描くとともに、下半には凹凸をつけて模様とする。6～16は茶碗である。17は口径が広めの椀である。18・19は角鉢である。一辺 10.8cm、器高 5.4cm、底径 5.3cm を測る。四側面の口縁部付近に瓢箪から駒のモチーフを描く。20～23は湯呑の蓋で、24～34は湯呑である。24・32・33の高台内には「白岳」、26・28・31の高台内には「萬」と記す。

第11図1は小椀である。口径 7.7cm、器高 4.6cm、底径 3.7cm。2～7は湯呑である。口径 7.6～8.4cm、器高 5.5～6.0cm を測る。8～12は杯である。9は記念の杯で、見込みにタバコの葉を重ねたもの。外面に「二十周年記念糸島郡たばこ耕作組合連合会」と金文字で記すが、大半が剥がれ痕跡のみとなる。なお、たばこ耕作組合法は昭和 33 (1958) 年に成立していることからこの杯は昭和 53 年 (1978) 年頃に作られて配られたものといえそうである。口径 5.5cm、器高 3.1cm、底径 2.3cm。10と12はセットになるものか。口径 6.0cm前後、器高 2.8cm。10は見込みに「明光寺改築記念」とある。明光寺は志摩新町に所在する寺で、ご住職に伺ったところ、昭和 11 (1936) 年に屋根の改



第8図 X-1トレンチ1~3号墓実測図、副葬小壺出土状況実測図 (1/20・1/10)

修、平成 18 (2006) 年に建て直されたとのことである。杯の損耗状況、および改築という文言から、前者の時に配られたと判断したい。また、12 の見込みには「緑松生追善」と記される。13 ~ 17 は角皿である。13 と 17、14 と 15・16 がセットになる。いずれも長軸 14cm 前後、器高 3.6cm 前後である。18 は丸い平皿である。口径 12.2cm。19・20 は見込みにエビを描く皿である。口縁部に切り



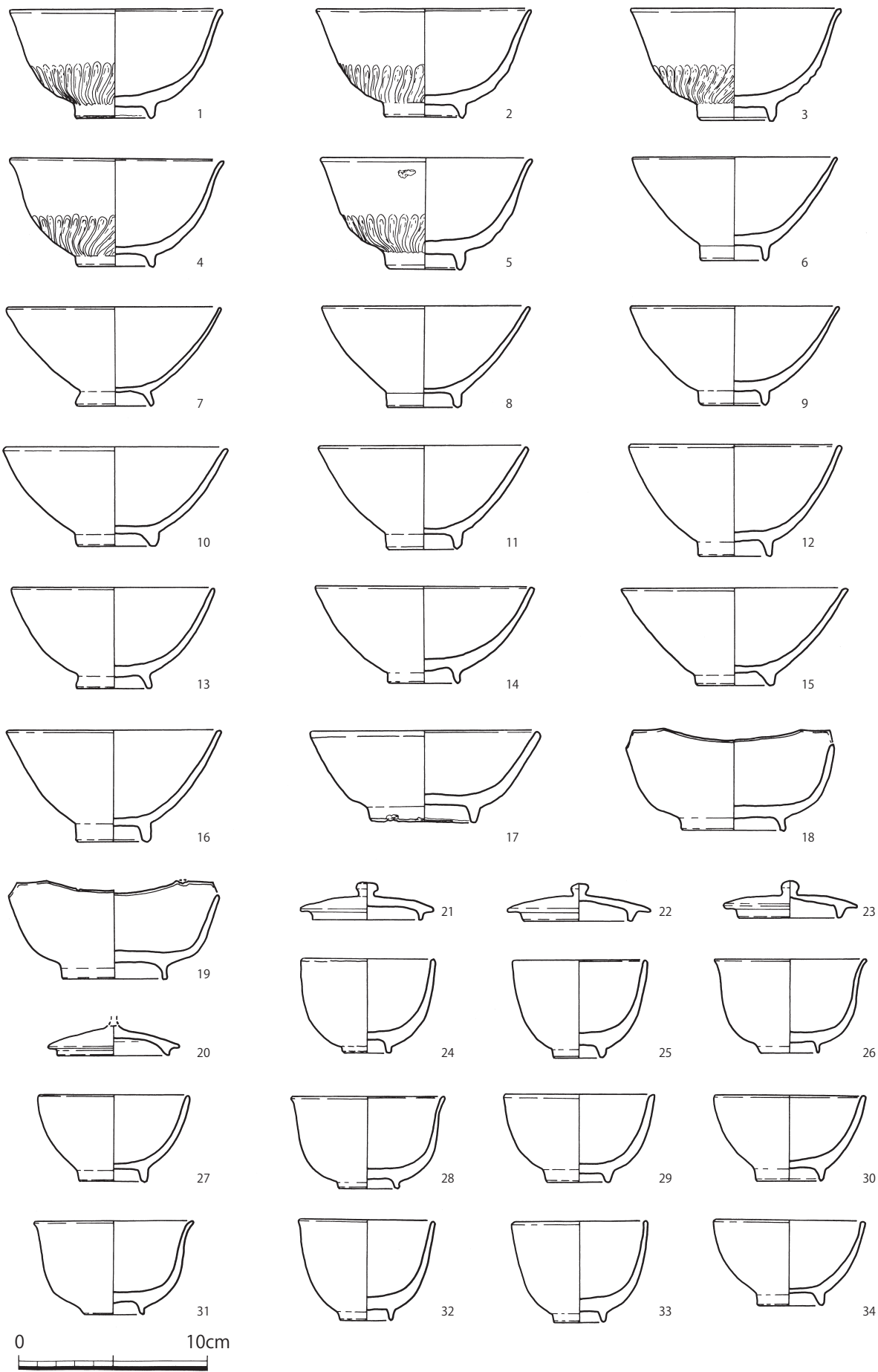
第9図 X-1トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

込みが入り花卉状となる。口径 15.3cm、器高 2.9cm。
21 は口縁部が波打つ平皿である。22 ~ 39 は丸小皿である。40 は蓋で竹を模したつまみをもつ。

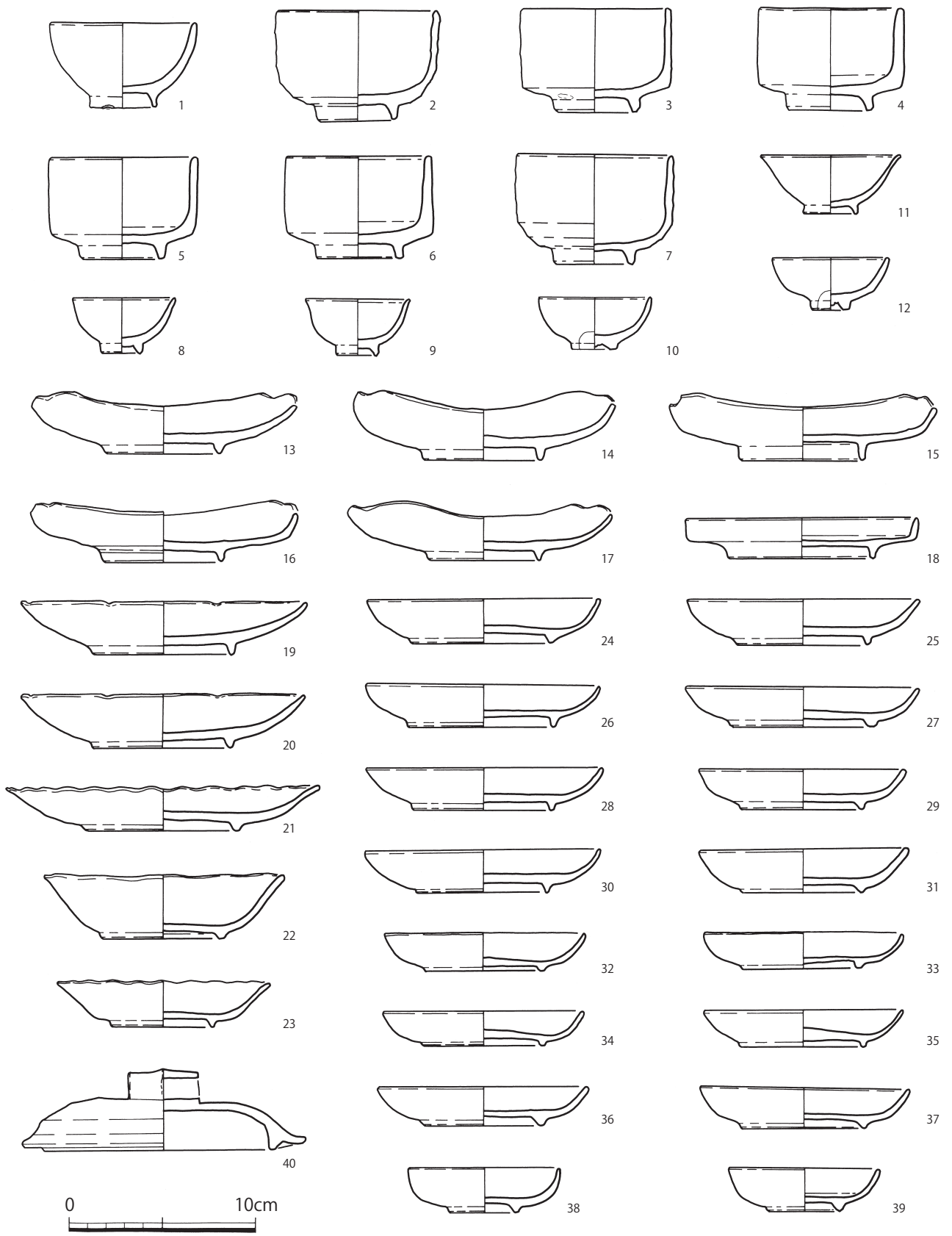
第 12 図 1 は陶器の瓶で淡浅黄色を呈する。底部は露胎である。口縁部は丸みを帯びて肥厚させる。器高 26.4cm、底径 9.2cm。2 は磁器の瓶である。口縁部は肥厚させ、底部の立ち上りは削られ、稜が入る。口径 2.8cm、器高 24.7cm、底径 8.4cm。3 は神棚で用いる榊立である。低い高台をもち、胴下半部に最大径がある。外面には松と梅を描く。口径 4.2cm、器高 15.6cm、底径 7.6cm。4 は陶器で一輪挿しのような花瓶である。口縁部は肥厚させ、細い頸部の下の大きく広がる胴部をもつ。口径 3.1cm、器高 12.2cm、底径 6.7cm。5 も花瓶か。口縁部を肥厚させ、細く短い頸部をへて、胴部に至る。陶器で口径 4.1cm、器高 21.3cm、底径 9.9cm。6 は徳利である。表に屋号を示し「新町」と表記する。時期で口縁を欠く。7 は磁器製の大型壺である。口径 6.8cm、器高 30.9cm、高台径 10.4cmを測る。外面に松の木の下で海を臨む人物を描く。

第 13 図 1・2 は陶器の蓋と甕でセットになる。
1 の蓋はつまみをもち、口縁部にかえりをもつ。2 は肩が張る甕で、底部付近を除き釉がかかり、灰黄色を呈する。3 は磁器で線香立てか。口縁が弱く外反し、高めの高台をもつ。見込みに山水図、外面に桜と椿を描く。4 は陶器の鉢で内外面に釉をかけるが、口縁部と高台部には及ばない。5 は磁器製の部材である。おそらく組み合わせて用いるものであろう。6 は磁器のコップで外面に花と葉と果物の絵を配する。高台内には「NARUMI CHINA」と王冠と月桂樹のしるしが入る。名古屋市に本社がある 1946 年創業の鳴海製陶株式会社によるものであろう。7・8 は急須である。蓋に「杖立」「壺」と記されており、杖立温泉で購入したお土産品か。急須はサザエを模した形である。9 は小型の瓶子である。肩部に椿を描き、胴部に「御神前」と記す。10 は方形の水差しで、四隅に L 字形の高台を有する。11 は磁器のスープカップか。12 は磁器製のレンゲである。13 は磁器製の徳利で、表面にクリの実と枝を描く。高台内に秋月と記す。14 も徳利である。竹を背景に扇を持つ翁と擬人化した雀、刀を持つ人物を描く。舌切り雀をモチーフとしたものか。高台内に金山と記す。15 は徳利に鉄製の蓋を被せたものである。絵は 14 と同じである。16 も徳利である。鶴と松を描く。17 はビール瓶である。アサヒゴールドの瓶で、1957 ~ 70 年代初頭に生産されたものである。裏面の四方に「R6 SN 65 4」とある。

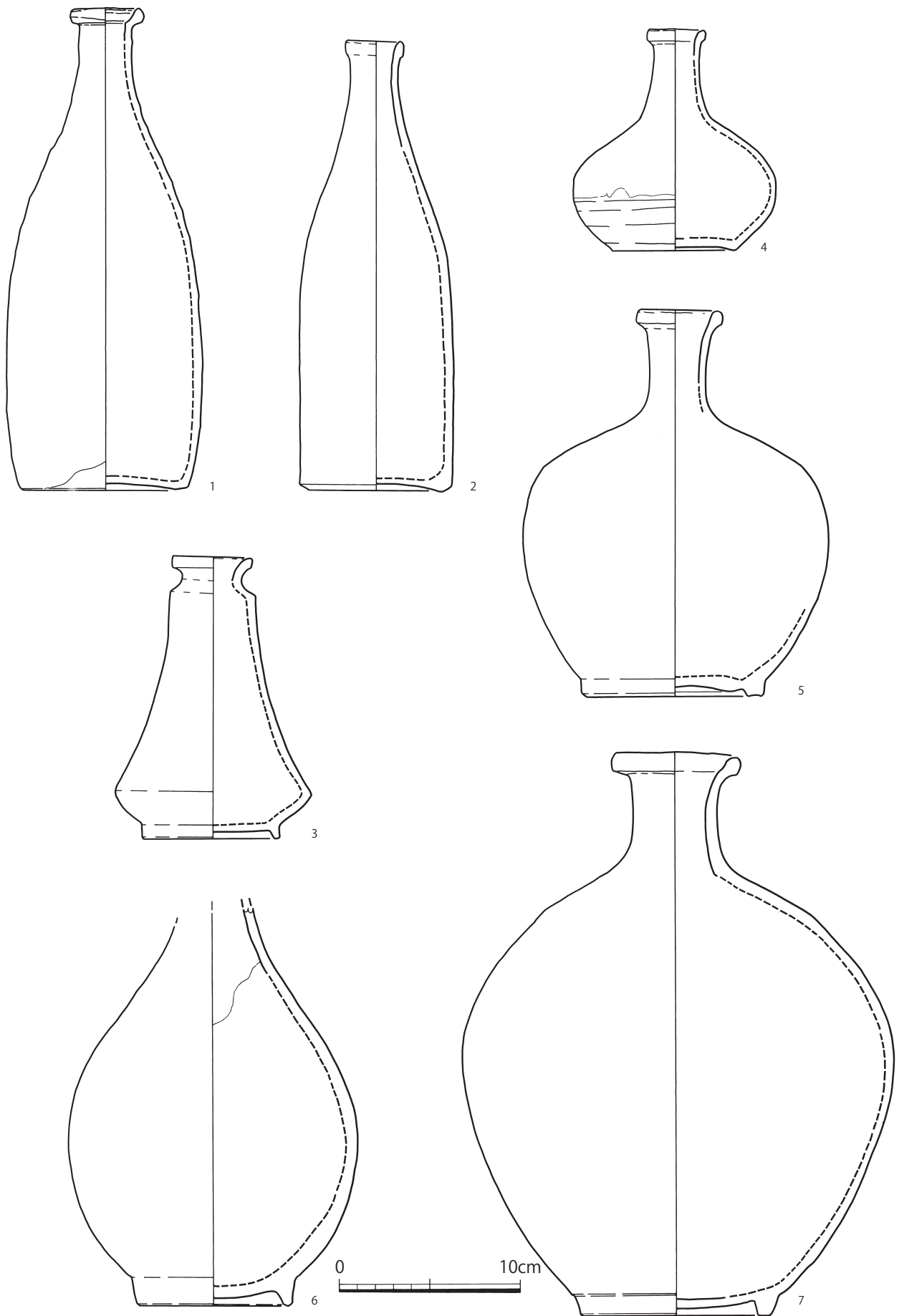
第 14 図 1 ~ 5 は土師皿である。型作り後、裏面に捺印し、外面に回転横ナデとミガキを施す。1・2 は見込み中央に梅を表し、上下に「太宰府神社」「一千年大祭」、裏面に「菅公會」「岡平造」とある。



第10図 X-1トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図1 (1/3)



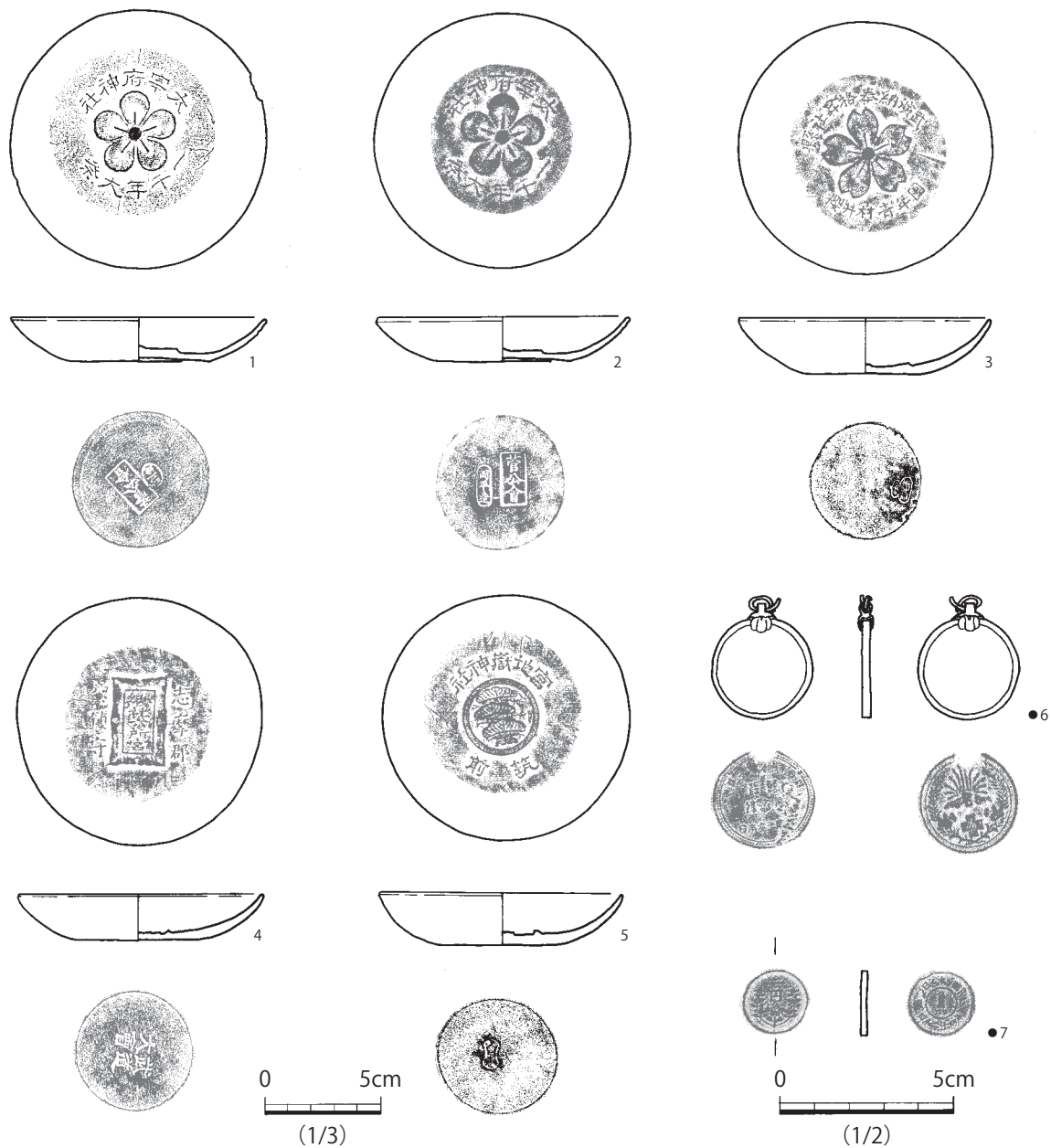
第 11 図 X-1 トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図2 (1/3)



第12図 X-1トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図3 (1/3)



第13図 X-1トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図4 (1/3)



第14図 X-1トレンチ攪乱土坑出土遺物実測図5（・は1/2・1/3）

太宰府神社の一千年大祭は明治35（1902）年4月1日に執り行われ、その時に配られたものだろう。ちなみに菅公會は明治32（1899）年8月に結成されたもので、会長は黒田長成氏であった。2は見込みの造形と合わせて裏面に捺印するが、1は天地逆に捺印されている。口径11.0cm、器高1.9cm、底径6.9cmでやや上げ底である。3は口径10.8cm、器高2.4cm、底径5.0cmで、見込みに中央に桜を表し、上下に「縣社昇格奉納演武」「桜井村青年團」とあり、裏面に瓢箪状の枠内に「ハカタ高尾製」と捺印する。『福岡縣神社誌』によると櫻井神社は大正12（1923）年7月31日に縣社昇格とあり、同年に演武が行われ記念品として配られたものと思われる。4は口径10.5cm、器高2.0cm、底径5.2cmで見込み中央に「郷社六所宮」と扁額状の枠内にしるし、その左右に「志摩郡」「惣鎮守」とあり、裏面に「武道大会」と捺印するが、正位から90°ずれている。5は口径10.6cm、器高2.3cm、底径5.2cmで、見込み中央に松を配し、その上下に「宮地嶽神社」「筑前」と表す。裏面は分銅形の枠内に「博多長吉焼」とある。

6は黄銅製の日本赤十字救護記念章である。環は大きくゆがむ。中央に鳳凰と赤十字を上下に配し、桐樹の花枝と竹を交差させたものが周囲を巡る。裏面には「明治三十七八年戦役」「救護」「記念章」「日本赤十字社」とある。日露戦争時に日本赤十字社は5,000人を超える救護員を戦地などに派遣しており、その救護員に明治38（1905）年以降に配布されたものと考えられる。

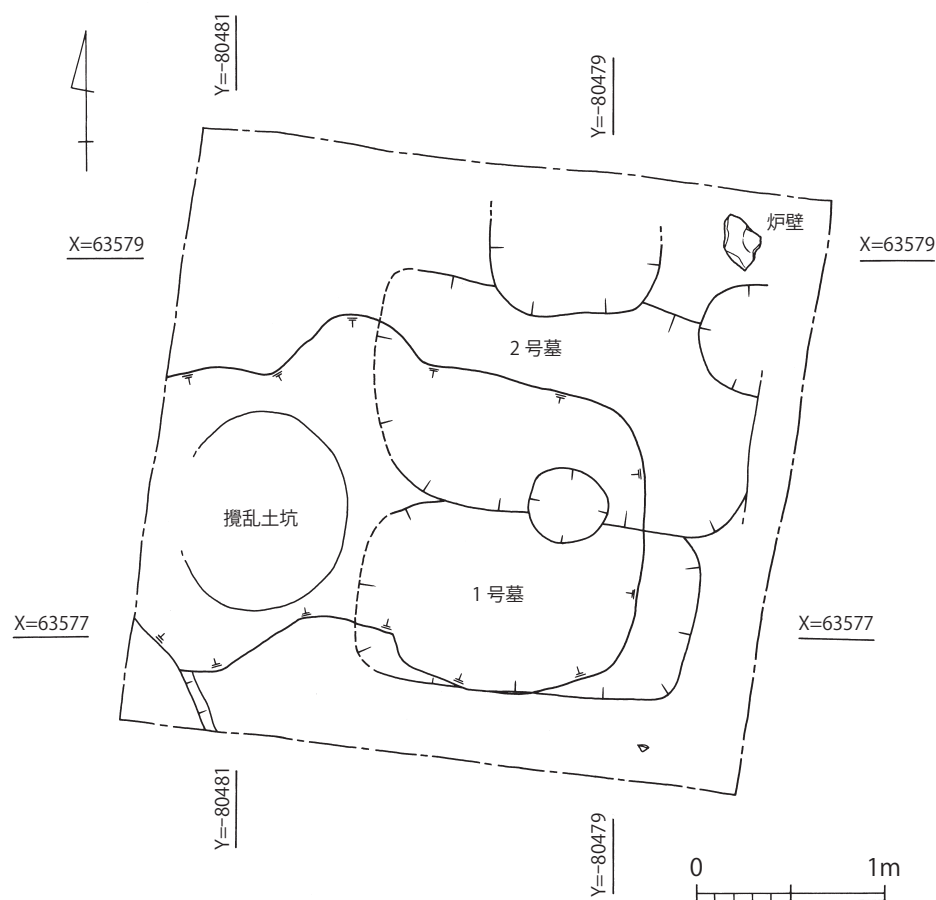
7は昭和24年製の1円黄銅貨である。昭和23（1948）年に発行開始され、昭和28（1953）年に通用停止とされた。

Ⅲ X-2 トレンチの調査

1. X-2 トレンチ（第15図）

志摩新町78番地に設定したX-1トレンチの北西側に設けたトレンチである。3.2m×3.3mのほぼ正方形にトレンチを設定した。西壁の土層断面図によると（第16図）、3層から掘り込まれた攪乱層（8層）があり、壁際は深く、標高2.5m付近から湧水が認められる。地山は11層で黄色砂層であり、表土から約80cm下の標高2.7m付近となる。

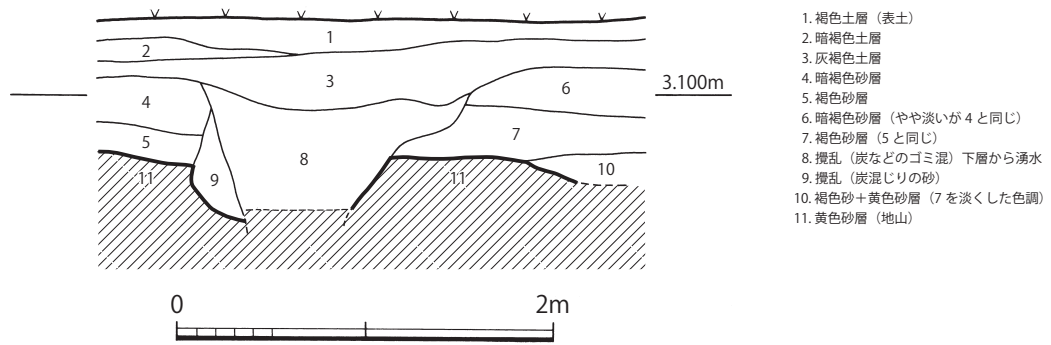
トレンチのほぼ中央から西壁外まで近代から現代の攪乱土坑が確認された。中には鉄くず等とともに炭が大量に出土しており、ごみを焼いた跡と判断される。この攪乱を除去すると直線的な立ち上がりが確認されたため、精査すると東西に長軸をもつ長方形の遺構が2基確認された。副葬小壺は出土していないが、その



第15図 X-2トレンチ調査区全体図（1/40）

平面形状から弥生時代早期～前期の墓と判断した。

南側を1号墓とするが、長さ約1.8m、幅0.9mを測るものの、西側が攪乱に切られて詳細は不明である。北に接する2号墓に切られる。2号墓は長さ約2.0m、幅1.14mを測り、東西方向に長軸をもつ。1号墓と同様に攪乱に切られる。なお、調査区の北東隅では炉壁が出土した（図版3-2）。



第 16 図 X-2トレンチ西壁土層断面図 (1/40)

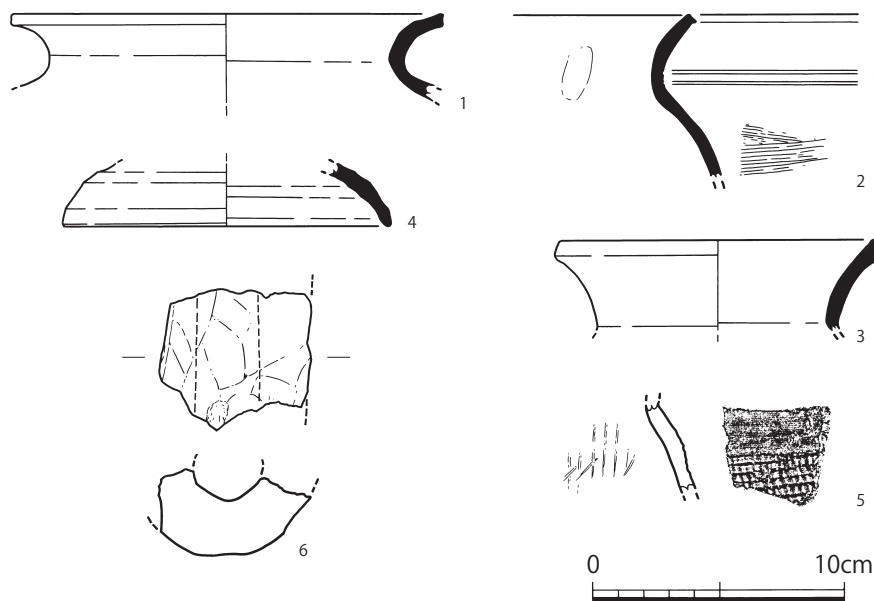
1) 遺物包含層 (第 17 図)

遺構に伴う遺物はなかったが、包含層より遺物が出土している。1は陶質土器の可能性ある壺である。口径 17.0cmに復元される。内外面ともに丁寧なナデを施す。2は須恵器もしくは陶質土器の小片である。器壁は薄く外面にカキメを残す。3は壺の口縁片である。4は坏蓋で口径は 13cmに復元される。5は土師質の甕である。外面に細かい格子タタキ、頸部に強い横ナデを施す。内面は当て具痕を残す。6は羽口片である。調査区北東角で出土した炉壁と関係するものであろう。

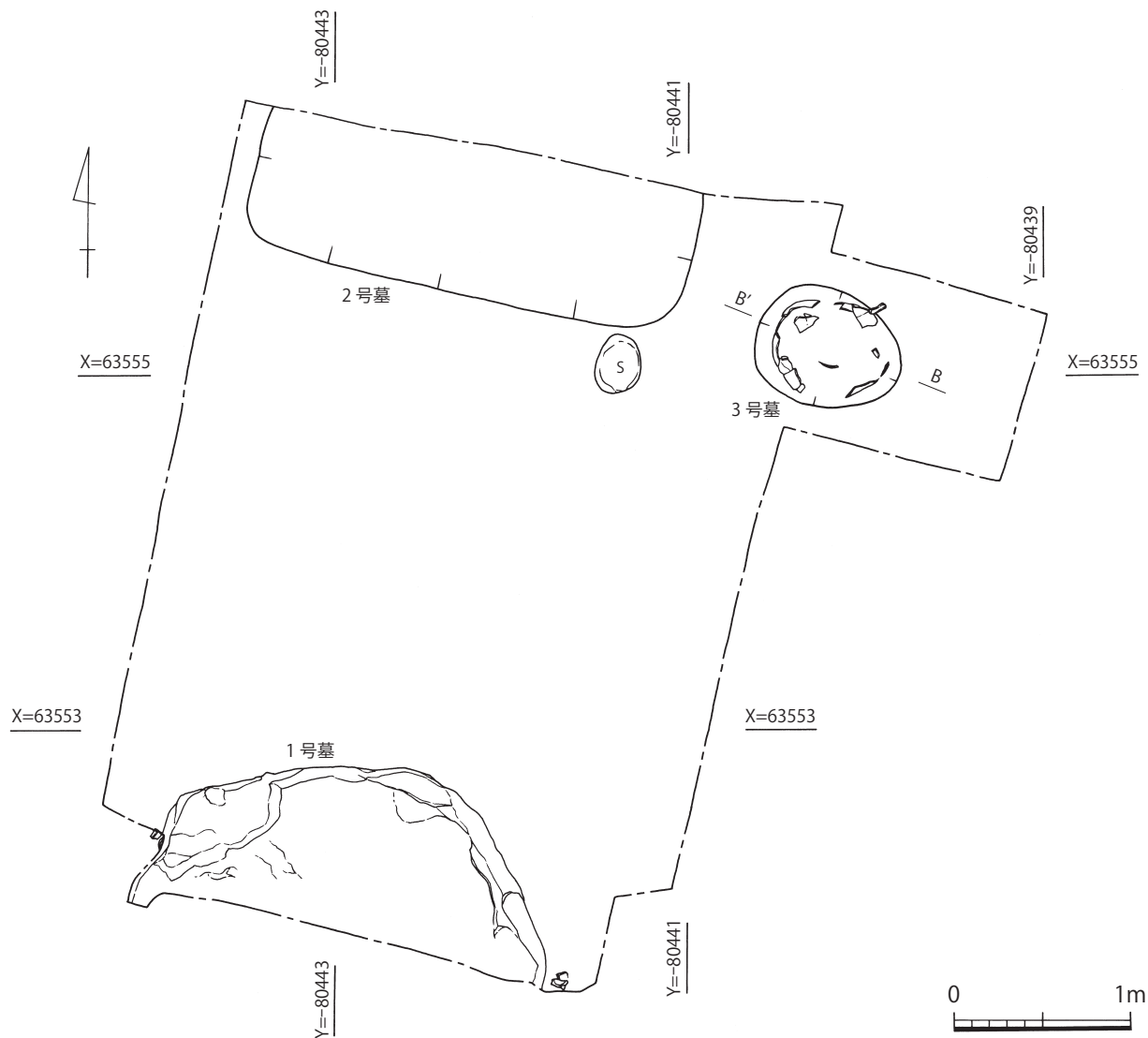
IV X-3 トレンチの調査

1. X-3 トレンチの調査 (第 18 図)

志摩新町 67 番地にトレンチを設定した。この地点は 2 次調査で II-03 トレンチとして調査された箇所と一部重なり、当時確認された支石墓である 4 号墓の上石の再確認と、盛土造成時に与える影響を確認するために調査を行った。



第 17 図 X-2トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

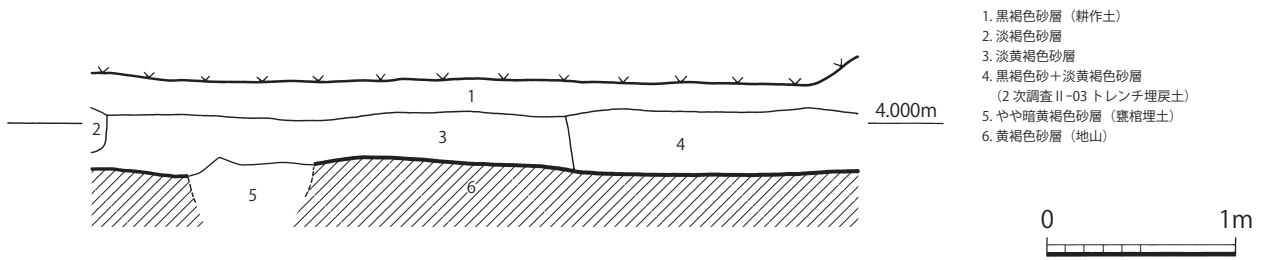


第 18 図 X-3トレンチ調査区全体図 (1/40)

調査区は 4.0m × 3.2m を基本とし、支石墓と道路の関係の確認、および北東隅で検出された壺棺の平面プランの確認のため、一部拡張した。

1) 支石墓

1号墓 (第 20 図) II-03 トレンチで確認された 4 号墓を本書では 1 号墓として報告する。2 次調査の報告では「トレンチ西端から 11m 程のところ支石墓上石があり 4 号墓とした。この石は青みを帯びた糸島閃緑花崗岩でその大半は未掘部分にある。発掘して露出した部分の長さは 205cm であるが、全長 270 ~ 280cm、幅 200cm 程の大きなものとなりそうで一部は道路下にあり現段階ではその全容は発掘できない。」(橋口編 1988) とあるように上石の南半分は道路下に伸びている可能性が指摘されている。ただ、当時は道路までやや余裕をもって調査されていたため、今回は 2 次調査のトレンチ確認から始め、支石墓部分については 40 ~ 50cm 程南側に拡張した形で調査を行った。



第 19 図 X-3トレンチ東壁土層断面図 (1/40)

その結果、現状で長さ 2.45m、幅 0.98m ほど検出したが、それから先は道路の下に潜ることが確認された。また、拡張部分は今回初めて発掘するため、支石墓検出面に至るまでに確認された土器を極力残して取り上げていったが、弥生時代中期前半から古代までの土器が出土した。また、国史跡新町支石墓群整備検討委員会の現地視察の際に、上石の下を清掃し、支石を確認するように指導があり、調査を行うと花崗岩製の支石が確認された。とくに東側の支石は 2 段重ねるものである。支石を重ねる事例は長野宮の前遺跡 39 号墓で見られる（岡部編 1989）。ただ 39 号墓は石囲い状に支石が配されており、新町例とはやや印象を異にする。また、支石付近から石の剥片を採取した。出土状況から上石が剥離した小片と判断される。足立達朗氏（九州大学比較社会研究院環境変動部門）によると斑レイ岩とのことであった。あわせて、副葬小壺の胴部片を確認した。これにより、1 号墓は板付 I 式新段階に位置付けられることが確認された。

出土遺物（第 22 図 1・2）第 22 図 1 は壺の頸部片である。2 とは接合しないが出土地点は近い。胴頸部の境に段をもつ。2 は副葬小壺の胴部片である。3 条の沈線で山形文を表すが、その閉じ方は不明。ただ土器片の右端に山形文となる沈線が 1 本認められる。胴部最大径の少し上に沈線を巡らし、山形文がぶつかる。胴下半に横ミガキを施す。内面は横ナデを施し、胴下半に接続痕を残す。

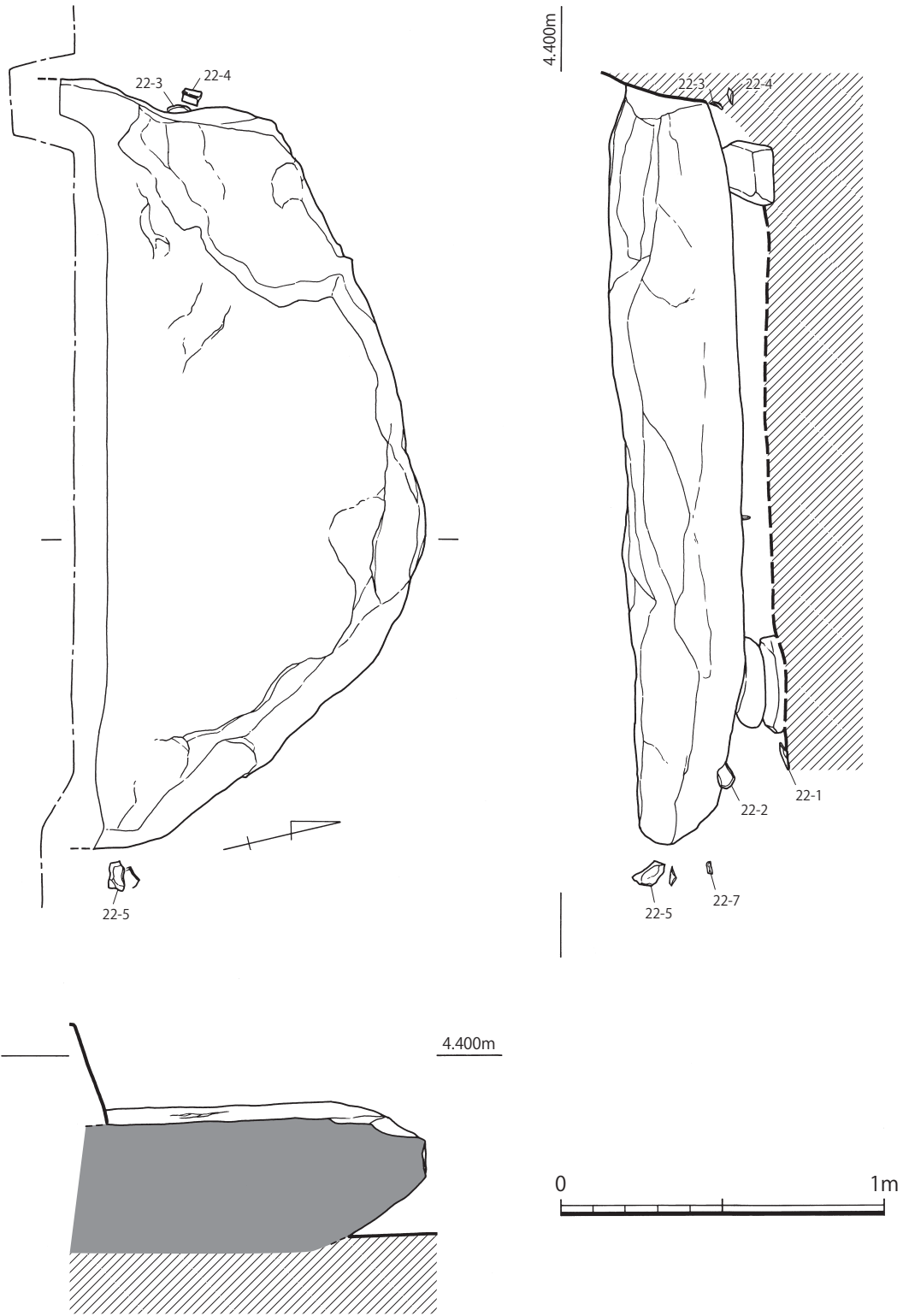
2 号墓（第 21 図）X-3 トレンチの北壁に接する形で確認されたもので、東西方向に長軸をもつ。南西隅に 35cm×25cm の丸石があることから、支石墓の上石が除去されたものと判断した。長さ 2.5m、幅 0.85m を測るが、長軸がやや長すぎる。他の遺構と切り合っている可能性もあるが、平面検出に止めたため、詳細は不明である。

2) 甕棺墓

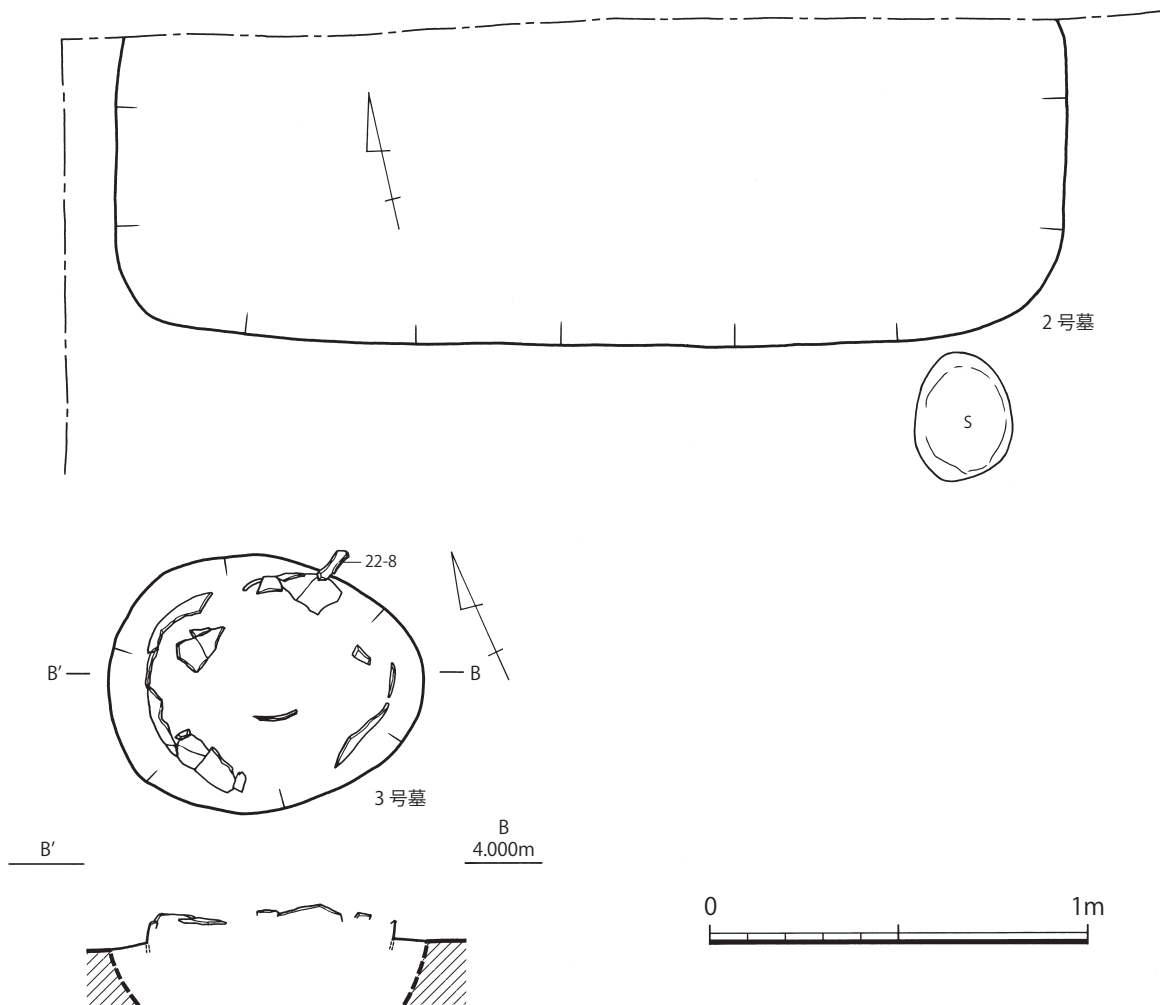
3 号墓（第 21 図）X-3 トレンチの北東壁際で約半分が確認されたため、調査区を拡張し平面プランを確認した。長軸 0.85m、短軸 0.66m である。上半分は削られているが、肩部の段が確認されることから、板付 I 式段階の壺棺の可能性が高い。2 次調査でも II-03 トレンチから板付 I 式の甕棺が 2 基確認されており（橋口編 1988）、同じ時期に墓群が営まれたと判断される。

3) 遺物包含層（第 22 図 3～11）

支石墓、甕棺墓に直接関係しないものをここで報告する。3・4 は支石墓の上石の大きさを確認する目的で調査区を南側に拡張した際に上石西側で確認された大型甕の口縁部片である。支石と上石が



第 20 図 X-3 トレンチ 1 号墓実測図 (1/20)



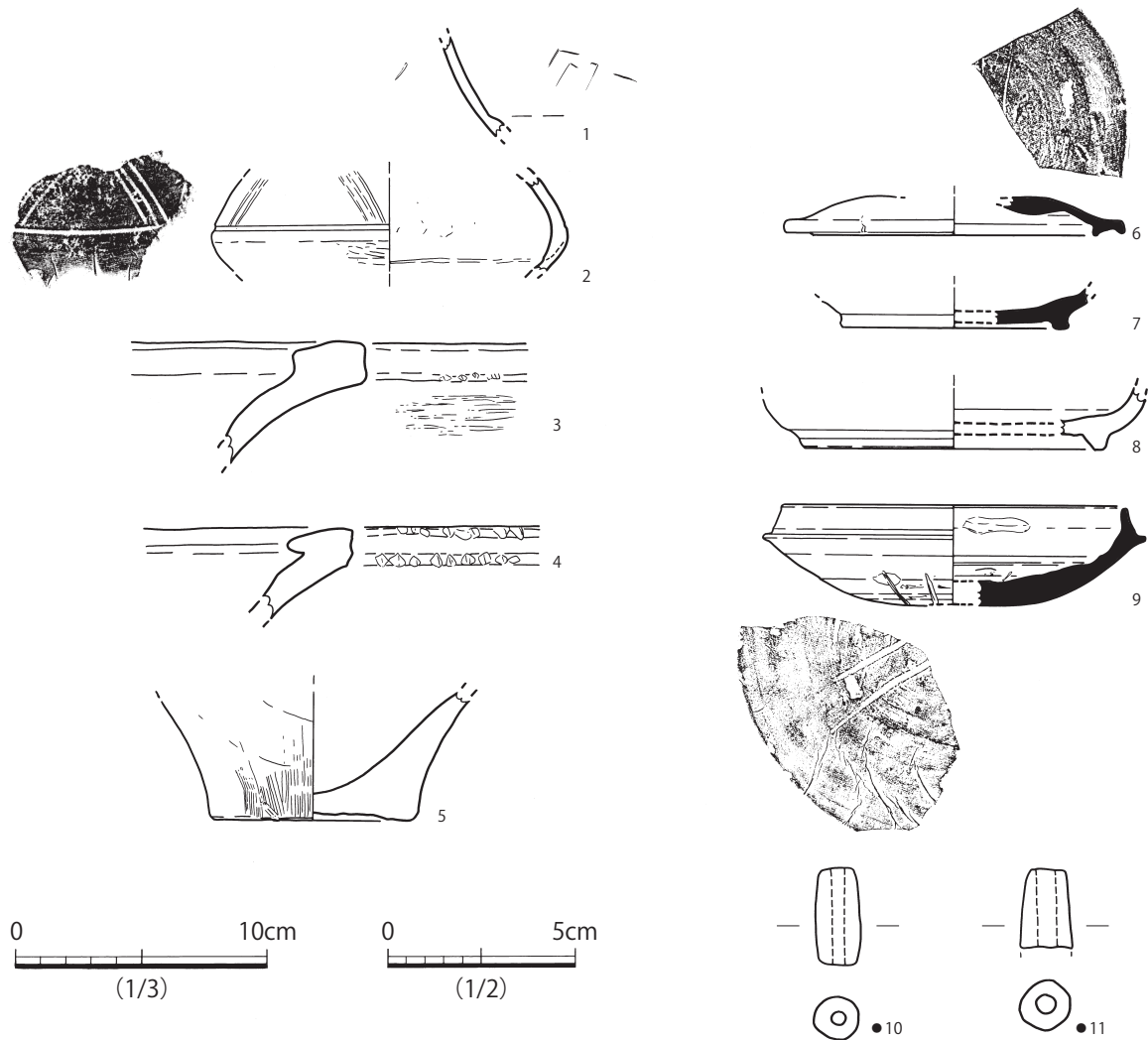
第 21 図 X-3トレンチ2・3号墓実測図 (1/20)

接するレベルで確認されたため、埋没の過程で破片の状態で紛れ込んだものである。当初は同一個体と考えたが断面が異なることから、別個体と判断した。3は口縁部に粘土を貼り付け肥厚させたもので、口縁端部に刻目があるが、剥離が多く詳細は不明である。外面は横ミガキを施す。4も口縁部を肥厚させるもので、口縁端部に刻目を施す。5は甕の底部で上石と同じレベルで出土した。外面にハケメを施し、底部はやや上げ底である。

6は支石墓上石より下のレベルで出土した須恵器坏蓋片である。かえりもち、天井部にヘラ記号を残す。7は5の下20cm弱で出土した須恵器坏身である。

8は上半を削られた甕棺である3号墓に接して出土した土師質の鉢である。胎土等から見て近世以降のものであろう。

9～11は包含層出土品である。9はII-03トレンチを再掘削した際に、トレンチの床から出土した須恵器坏身である。口径13.6cm、器高4.0cmで外面にヘラ記号を残す。焼成は良いが調整は粗く、内面に粘土の削りカス状のものが張り付く。10・11は土錘である。



第 22 図 X-3 トレンチ出土遺物実測図（●は 1/2・1/3）

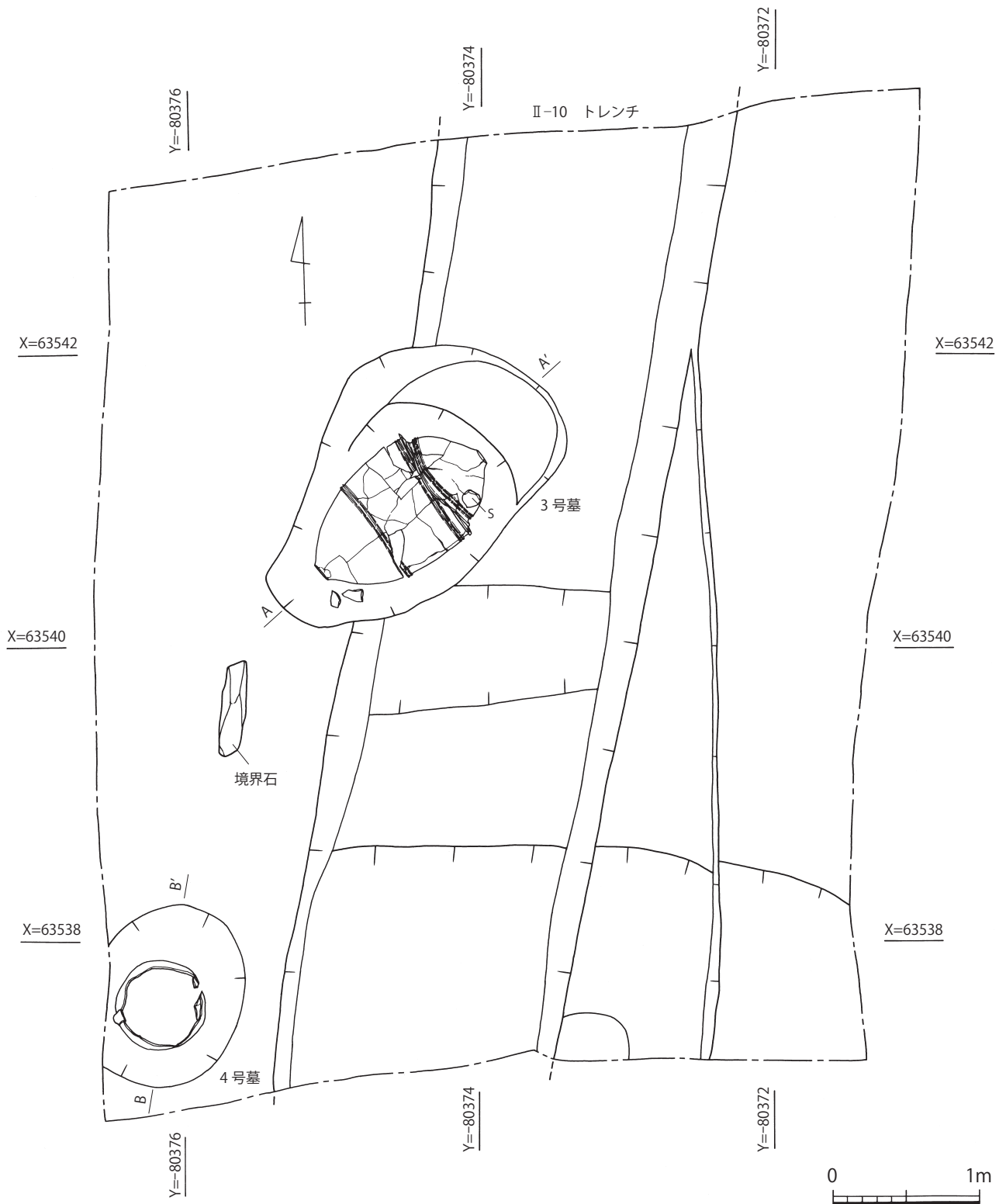
V X-4 トレンチの調査

1. X-4 トレンチ (第 23 図)

志摩新町 54-1 番地にトレンチを設定した。この地点は史跡整備に際して盛土を実施する箇所に該当するが、国史跡新町支石墓群整備検討委員会における検討の中で、2次調査Ⅱ-10 トレンチの調査成果から地表面付近に残りのよい甕棺の存在が想定されるとの指摘があり、盛土の工法が課題として挙げられていた。そこで、Ⅱ-10 トレンチと重複するかたちでX-4 トレンチを設定した。

当初は 5.2m × 4.0m のトレンチを設定したが、埋土が砂でⅡ-10 トレンチのプラン確認が困難であったため、トレンチを拡張し最終的には 6.4m × 5.2m の 33.28㎡の調査区となった。ただ、途中でプランが確認できたため、基本的にⅡ-10 トレンチを掘り下げ、そのほかの部分は最小限の調査に止めた。

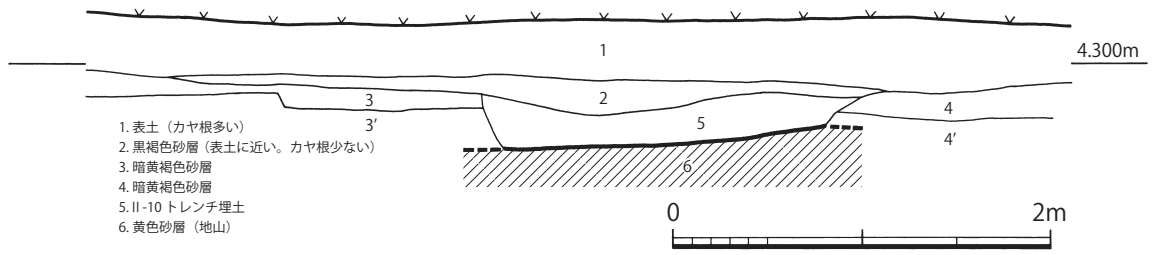
Ⅱ-10 トレンチでは 3 基の甕棺が検出され、トレンチ中央で確認された中期初頭の小児棺である 1 号甕棺のみが取り上げられている（橋口編 1988）。2 号甕棺は調査区の南東角でトレンチ外に広がっているために平面プランのみの確認。3 号甕棺も甕棺の口縁部をわずかに確認したものの平面プランのみの検出に止められた。



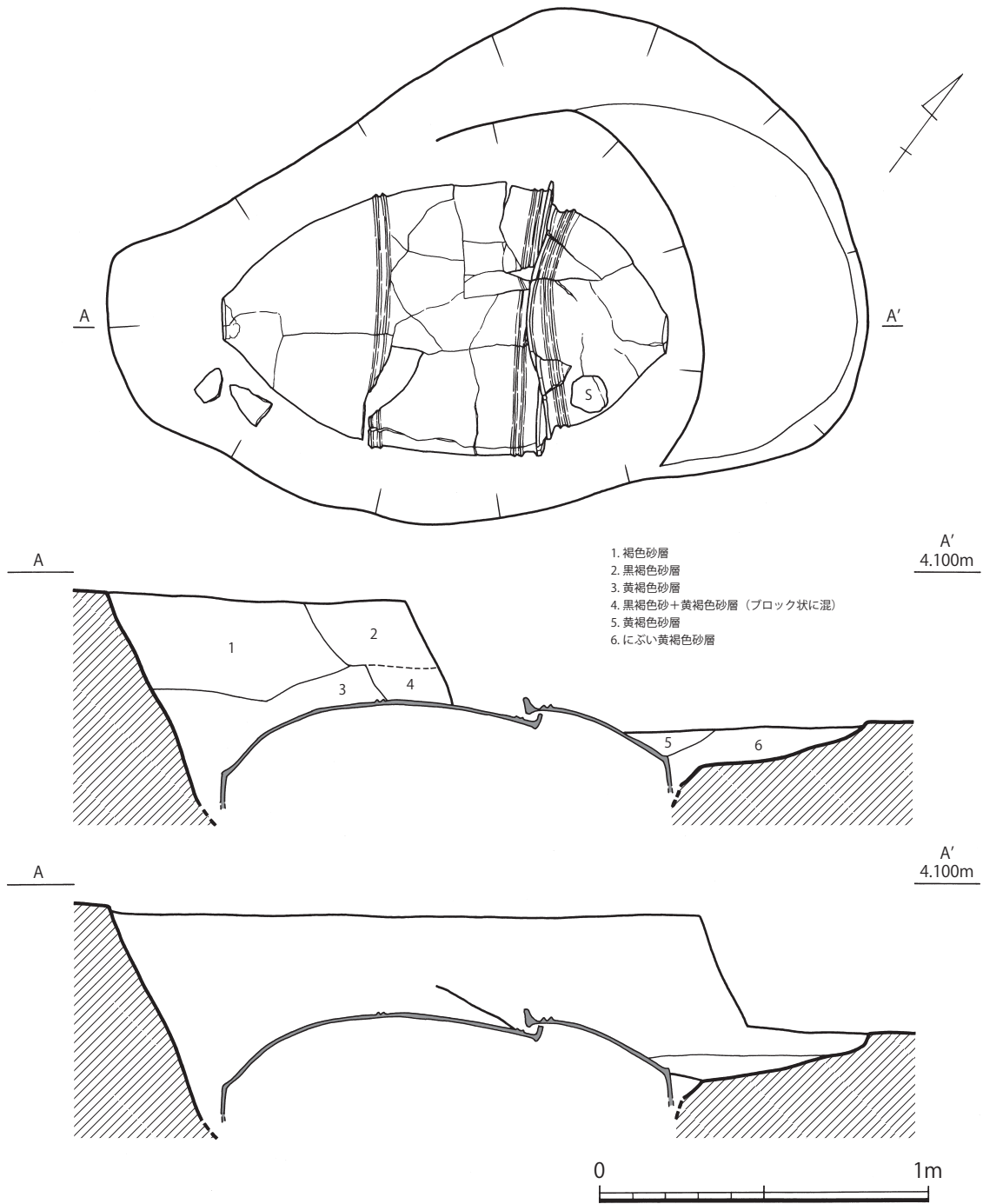
第 23 図 X-4トレンチ調査区全体図 (1/40)

X-4 トレンチの南壁の土層断面図によると (第 24 図)、表土が 30cmほどあり、II-10 トレンチは現地表面下 65cmほどが遺構面で、北に向かうにつれ下がっていることを確認した。その結果基本的に盛土を実施しても甕棺などの遺構に与える影響は小さいと判断した。

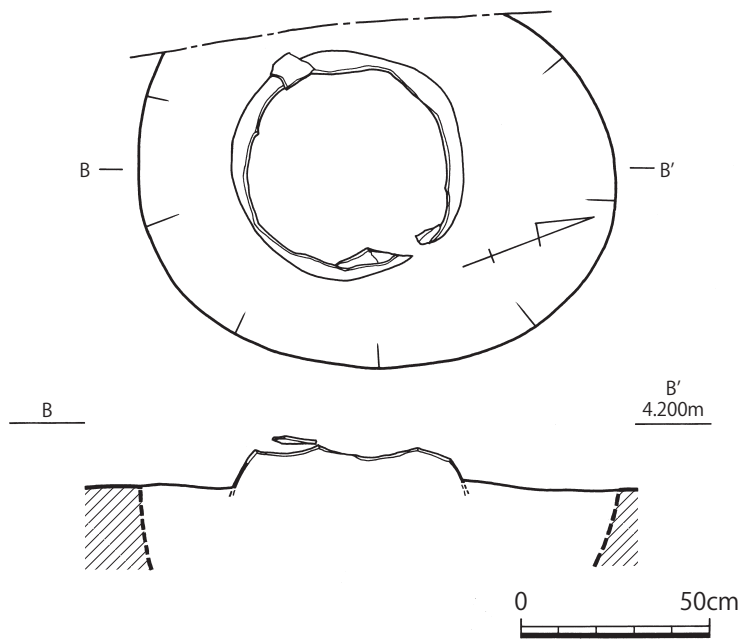
なお、本報告ではX-4 トレンチであらたに確認された甕棺はII-10 トレンチで確認された甕棺番



第 24 図 X-4トレンチ南壁土層断面図(1/40)



第 25 図 X-4トレンチ3号墓実測図 (1/20)



第 26 図 X-4 トレンチ 4 号墓実測図 (1/20)

のである。下甕に大型の甕、上甕に大型の鉢を用い、棺の主軸は N-55°-E を取る。埋葬角度は水平に近いと判断され、残りは良い。今回は平面確認に止めたが、金属探知機をあてると下甕下半から強い金属反応が確認された。

土層を確認すると別の甕棺を壊して置かれたことが分かり、墓壙内には別の甕棺片が 2 点確認される。未調査であるが、畑の境界石とされる石材は、本来標石であった可能性もあろう。

上甕 大型の鉢で、内傾気味の逆 L 字状の口縁をもち、口縁の下には 2 条の三角突帯を巡らせる (第 27 図 2)。器高は約 42cm、口径は約 72cm、底径は約 12cm である。

下甕 専用棺の甕で、逆 L 字状の口縁をもち、内面へ大きく突出する。口縁部下に低い三角突帯を 2 条巡らせる (第 27 図 1)。胴部中位にも 2 条の三角突帯を巡らせ、胴部下半に黒斑がある。器高は約 95cm、底径は約 13cm、甕棺が土圧で割れているため正確な口径は不明である。

4 号墓 (第 26 図) X-10 トレンチの南西隅で新たに確認されたもので、直径 1.26m の墓壙をもつ。平面検出に止めているが壺棺の可能性はある。

2) 遺物包含層 (第 27 図 3 ~ 16)

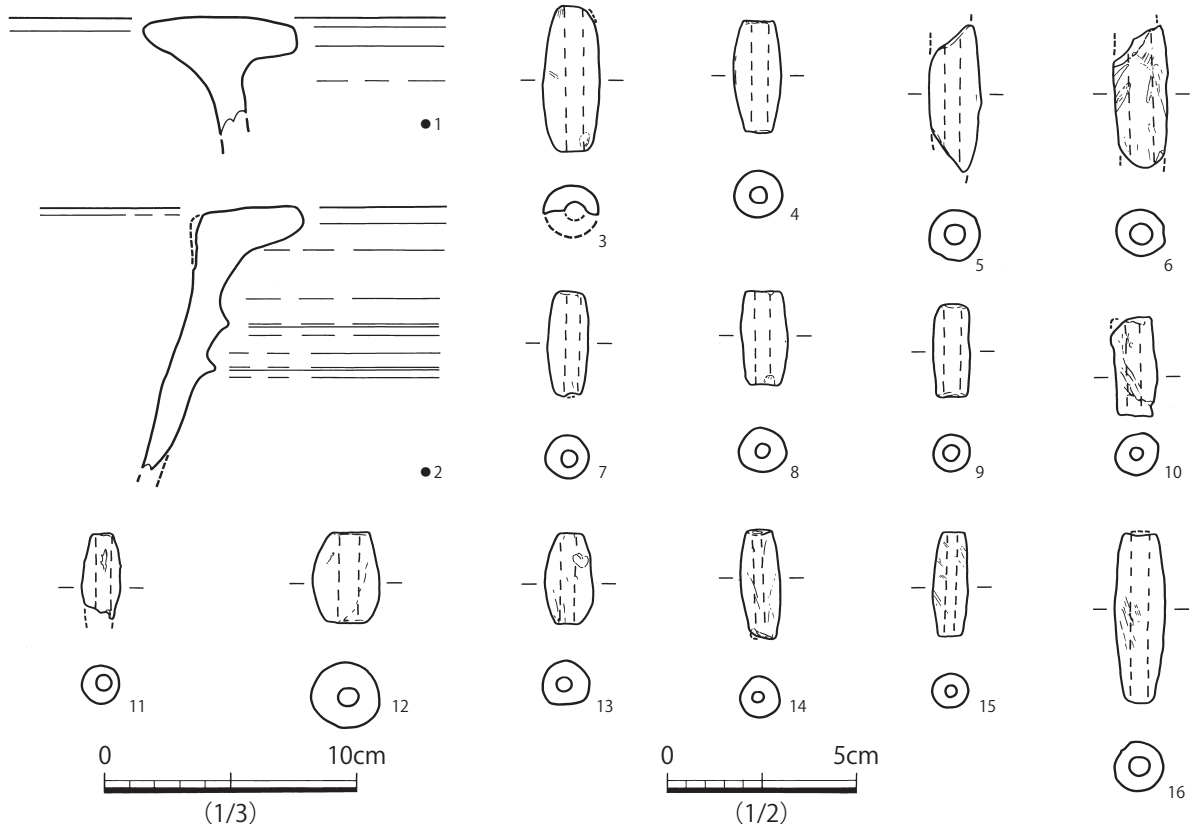
3 ~ 16 は X-4 トレンチで確認された管状土錘である。このうち 3 ~ 12 は地表面下 30cm までで出土したものである。3 は縦方向に破損したもので長さ 3.85cm を測る。4 は小型のもので、胴部中位に最大径をもつ。5・6 は両端部を欠く。7 は完形の土錘で全体的に丸みをもつ。8 はほぼ完形で両端部は面をとる。9 は長さ 2.4cm を測る小型の土錘である。10 は端部を欠くがほぼ完形の土錘で、焼成は硬質である。11 は中位に最大径をもつもので、1/2 弱を欠く。12 は丸みが強い土錘で、長さ 2.42cm を測る。13 ~ 16 は調査区西側の包含層から出土した土錘である。13 は胴の張りが強いもので、長さ 2.42cm を測る。14 は端部を欠くもので、15・16 は完形の土錘である。いずれも端部に面をとる。

号に後続するものとし、調査区の南西隅で 4 号甕棺を検出した。

1) 甕棺墓

3 号墓 (第 25 図) II-10 トレンチで平面プランのみ検出されていた甕棺墓である。報告書の平面図には拳大の丸い石状のものが全体図に掲載されており、とくに記述はされていなかったが、今回の調査で同じものを確認できたため、3 号墓と判断した。今回は時期の確認の意味もあり甕棺の平面検出まで行った。

3 号墓は長軸 2.3m、短軸 1.5m の墓壙内に成人用甕棺を納めたもの



第 27 図 X-4 トレンチ出土遺物実測図 (1/2・●は 1/3)

第 4 章 おわりに

新町遺跡第 10 次調査は、史跡整備に伴う発掘調査で、4 か所のトレンチを設定したが、いずれも一定の成果が得られた。以下、トレンチごとに成果をまとめる。

指定地の北西部に設定した X-1 トレンチでは上石が動かされた支石墓と判断される墓を 3 基確認した。1・2 号墓には夜臼式の副葬小壺が伴う。既に新町支石墓群では時期を経るに従い西から東へ墓群が展開すると指摘されていたが、今回の調査もその見解を補強するものとなった。また、攪乱土坑からは日本赤十字救護紀年章など近代史関連資料が出土した。

X-2 トレンチは X-1 トレンチの北西側に設定した。現代の攪乱により、遺構面が荒らされていたが、支石墓の可能性のある墓を 2 基確認した。また、炉壁や羽口など古代の製鉄関連の遺物も出土した。

X-3 トレンチは II-03 トレンチで確認された支石墓の再調査であった。支石墓上石の下から板付 I 式新段階に位置づけられる副葬小壺の破片が出土し、支石墓の時期の特定ができた。また、小児棺も確認され、墓群が東に変遷するに伴い小児棺が増える可能性もある。

指定地の東端に位置する X-4 トレンチでは弥生時代中期中葉の成人用甕棺を検出した。遺構は保存されるため、平面検出のみにとどめたが、下甕から強い金属反応が出たことから、青銅器などの副葬品を伴う可能性が高い。

图 版

図版1



1-1 新町遺跡X-1トレンチ全景



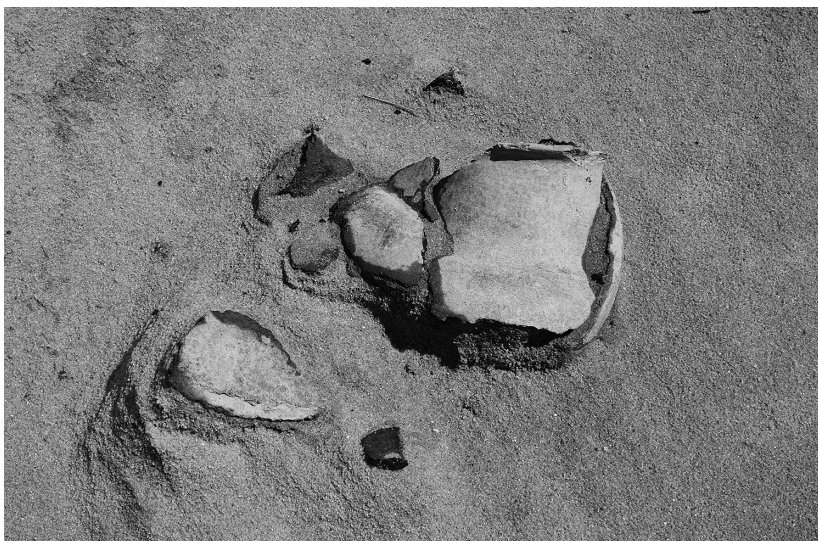
1-2 1号墓検出状況



1-3 1号墓副葬小壺出土状況



2-1 2号墓検出状況



2-2 2号墓副葬小壺出土状況



2-3 西壁土層



3-1 新町遺跡X-2トレンチ全景



3-2 炉壁出土状況



4-1 新町遺跡X-3トレンチ全景



4-2 1号墓上石

図版5



5-1 1号墓副葬小壺出土状況



5-2 1号墓東側支石検出状況



5-3 3号墓検出状況

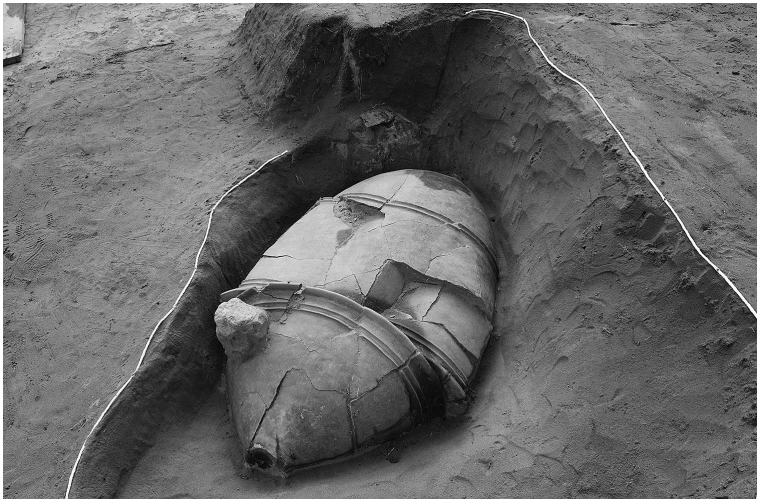


6-1 新町遺跡X-4トレンチ全景



6-2 3号墓検出状況（西から）

図版7



7-1 3号墓検出状況（北から）



7-2 3号墓金属探査機使用状況

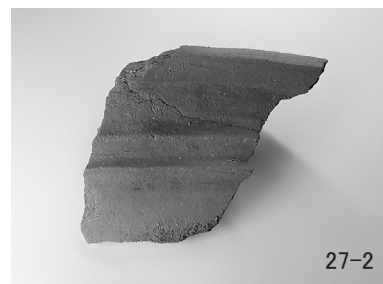


7-3 4号墓検出状況



新町遺跡第10次調査出土遺物①

図版9



新町遺跡第10次調査出土遺物②

報告書抄録

フリガナ	シンマチシセキボグン							
書名	新町支石墓群							
副書名	史跡整備に伴う新町遺跡第10次調査							
巻次								
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	平尾和久							
編集機関	糸島市							
所在地	〒819-1192 福岡県糸島市前原西一丁目1-1							
発行年月日	令和6(2024)年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
シンマチイセキ 新町遺跡 ダイシチヨウサ 第10次調査 シンマチシセキボグン (新町支石墓群)	志摩新町78番地	40230		33.5701	130.1332	2022.8.22 ~ 12.9	11.07m ²	重要遺跡 確認調査
	志摩新町78番地			33.5702	130.1331		10.56m ²	
	志摩新町67番地			33.5697	130.1335		15.12m ²	
	志摩新町54-1番地			33.5699	130.1342		33.28m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
X-1 トレンチ (志摩新町78番地)	墓地	弥生・近代	支石墓、 近代攪乱土坑	弥生土器、近代陶磁器		重要遺跡 確認調査		
X-2 トレンチ (志摩新町78番地)	墓地	弥生	支石墓の可能性が ある土壇墓	羽口、炉壁				
X-3 トレンチ (志摩新町67番地)	墓地	弥生	支石墓、甕棺墓	弥生土器				
X-4 トレンチ (志摩新町54-1番地)	墓地	弥生	甕棺墓	弥生土器				

新町支石墓群

— 史跡整備に伴う新町遺跡第10次調査 —

糸島市文化財調査報告書

第33集

令和6(2024)年3月31日

発行 糸島市

福岡県糸島市前原西一丁目1番1号
TEL 092-332-2093

印刷 株式会社 三光

福岡市博多区山王1丁目14番4号

